

# 安田貯蓄銀行と安田財閥

浅井良夫

## 一 はじめに

戦前のわが国において、大衆の零細貯蓄預金を扱う貯蓄銀行の制度が普通銀行制度と別個に存在したことは周知のところである。<sup>(1)</sup>しかし、実際に貯蓄銀行と普通銀行とが画然と区別されていた訳ではなかった。普通銀行の内には、零細預金吸収のために貯蓄銀行を子銀行として設立したり、貯蓄銀行業務を兼営するものが多かった。一九二二年の貯蓄銀行法施行までは普通銀行の貯蓄銀行業務兼営は法律上認められていた。<sup>(2)</sup>

こうした中で、三井、三菱、住友の総合財閥系三行が傘下に貯蓄銀行を持たなかったことは注目に値する。しかし、総合財閥系以外の都市銀行の場合は、傘下に貯蓄銀行を有するものがむしろ通例であった。その理由を進藤寛氏は非総合財閥系の安田、第一、川崎三行について次のように述べている。<sup>(4)</sup>

安田、第一、川崎の三行も、やはり財閥系の銀行と呼ばれているが、これらは前記三行（三井、三菱、住友の三行——引用者）とは異なり、傘下にあまり有力な産業企業がなかった。だから、前記三行に比べると、中企業または問屋などへ

安田貯蓄銀行と安田財閥

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

の長期の融資が多く、資産源もまた幅広くなっており、零細な貯蓄性預金までも吸収する必要があったから、子銀行としての貯蓄銀行を設立したと考えられる。

都市銀行が傘下に貯蓄銀行を擁するかどうかの問題は、都市銀行の預金政策とも深く拘わっている。例えば、三井の場合、貯蓄銀行条例成立直後の一八九一（明治二四）年に駿河町貯蓄銀行の設立を計画したが実現には至らなかった。<sup>(5)</sup> 当時三井銀行が中上川彦次郎の改革の一環として官公預金返上を断行したため、それに代わる資金源を創出するという動機から貯蓄銀行設立が目論まれたものと思われる。しかし、その後三井銀行は資金を充実にさせ、一九〇〇～〇一年の恐慌後には日銀借入金への依存状態から脱出した。借入金依存から脱出した後の一九〇三（明治三六）年、三井銀行経営陣の中から、大衆的零細預金の性格が強い小口当座預金（今日の普通預金）を漸次廃止せよという意見が呈出された。<sup>(6)</sup> そして、それ以降、小口当座預金の増大は抑えられたのである。<sup>(7)</sup>

小口当座預金抑制の金融史的意義について朝倉孝吉氏は、「零細な預金を集めて、それを不動産担保で高利で貸し出す金貸会社の形態の一つの支柱である『小口当座預金の整理——貨幣取扱業者、金貸会社の業況からの進化』として受けとめるべきであろう<sup>(8)</sup>」と述べている。すなわち、朝倉氏は小口当座預金抑制政策を銀行近代化の重要なメルクマールの一つとして把えているのである。朝倉氏の論理を用いれば、当然貯蓄銀行預金についても同様の結論が導かれるであろう。

このように、都市銀行と貯蓄銀行との関連は、財閥資本の構造、都市銀行の預金政策とも結びつく問題なのである。しかし現在までのところ、都市銀行系貯蓄銀行を分析した独自の研究は存在しない。そこで本稿では安田財閥傘下の安田貯蓄銀行をとりあげ、経営内容の推移を具体的に分析することにより、都市銀行と貯蓄銀行との

関連、非総合財閥と貯蓄銀行との関連の一端を明らかにしたい。

本論に入るに先立ち指摘しておきたいのは、都市銀行系貯蓄銀行と云っても、多様性に富んでおり、容易に共通項で括ることができないということである。『本邦貯蓄銀行史』は明治末～大正初期における貯蓄銀行の親銀行への依存関係について分析し、「貯蓄銀行は、依存度の薄い順から、完全独立型（不動貯金）、独立型（大阪貯蓄など）、独立型と依存型の間中型（東京貯蓄）、依存型（金城貯蓄など）、極端な依存型（川崎貯蓄など）の五つの型に分けられる<sup>(9)</sup>」との結論を出している。同じ都市銀行系の貯蓄銀行でも親銀行への依存度の強弱に大きな差があったのである。したがって、本稿での結論をもって直ちに都市銀行系貯蓄銀行全体を推断することはできないであらう。

注

- (1) 預金吸収面における普通銀行と貯蓄銀行との相違は、(一)普通銀行は一回五円（一九二二年以降は一〇円）以下の預金を扱うことができない、(二)貯蓄銀行は据置貯金・定期積金を扱うことができる、の二点である。なお詳しくは、拙稿「貯蓄銀行法の成立と独占的貯蓄銀行の形成（上）」成城大学『経済研究』六四号（一九七九年二月）八〇～八二頁参照。

(2) 普通銀行の貯蓄銀行業務兼営は一九四三年五月に再び認められた。

(3) 本稿では都市銀行を、金融市場を独占的に支配する近代的大銀行と定義する。戦後に一般化した都市銀行の用語を戦前期にも用いる意味については、石井寛治「地方銀行の成立過程——地方銀行と都市銀行の分化」『地方金融史研究』三号（一九七〇年一月）参照。

(4) 進藤寛「明治時代の貯蓄銀行」金融経済研究所編『日本の銀行制度確立史』（一九六六年）所収、二三九頁。

安田貯蓄銀行と安田財閥

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

- (5) 同右論文、二三五～六頁。
- (6) 『三井銀行——一〇〇年のあゆみ』(一九七六)八二～三頁。
- (7) 同右書、九二～四頁。
- (8) 朝倉孝吉『銀行経営の系譜』(一九七八年)八六頁。
- (9) 協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』(一九六九年)一〇九～一一四頁。

## 二 金城貯蓄銀行と明治商業銀行

安田貯蓄銀行の全史は、金城貯蓄銀行時代(一八九六～一九一九年)と安田貯蓄銀行時代(一九二〇～一九四五年)に二分することができる。一九二〇年一月に安田貯蓄銀行と改称するまで、金城貯蓄銀行は安田家の直接の支配下にあったとはいえず、安田系列銀行の一つである明治商業銀行の子銀行にすぎなかった。安田貯蓄銀行に改組されてから、安田銀行の子銀行となり、名実共に安田財閥全体の貯蓄銀行部門に発展したのである。

このことは七大貯蓄銀行<sup>(1)</sup>の預貯金残高の推移を見れば明瞭にわかる(第一図)。名古屋の貯蓄銀行三行が合併して成立した日本貯蓄銀行を別にすれば、安田貯蓄銀行の発展は最も遅れた。安田貯蓄銀行は一九二〇年代前半に飛躍的な発展をとげ、第一次大戦期には中堅貯蓄銀行であったのが一九二四年には業界第二位の大阪貯蓄銀行と肩を並べるに至った。一九二〇年の安田貯蓄銀行への改組まで、安田財閥傘下の二大銀行であった安田銀行、第三銀行は子銀行として貯蓄銀行を持たなかった。安田財閥の貯蓄銀行に対する政策を知るために、まず金城貯蓄銀行の成立事情を明らかにし、次いでその経営内容を分析しておきたい。

第1表 明治商業銀行創立時の株主と役員

株 主		役 員	
氏 名	株 数	役職名	氏 名
×前田 利嗣	10,000	頭 取○	安田 善助
○安田銀行	2,000	取締役○	安田善四郎
○東京火災保険	2,000	○	武井 守正
○帝国海上保険	2,000	×	片山 遠平
馬場 道久	1,200	△	米倉 一平
○安田善次郎	1,000	×	平野 小平
○安田 善彌	1,000	×	齋藤 彌久
○共済生命保険	1,000	監査役×	南郷 茂光
○安田 善助	1,000		阿部彦太郎
○安田善三郎	1,000	×	水登勇太郎
△米倉 一平	1,000		
阿部彦太郎	1,000		
全 株 数	60,000		

注1：株主は1898年末。

2：○は安田系，×は前田・金沢系，△は米穀商。

出典：株主は東京興信所『銀行会社要録』第3版（1899年），役員は明治商業銀行『沿革誌』（1923年）による。

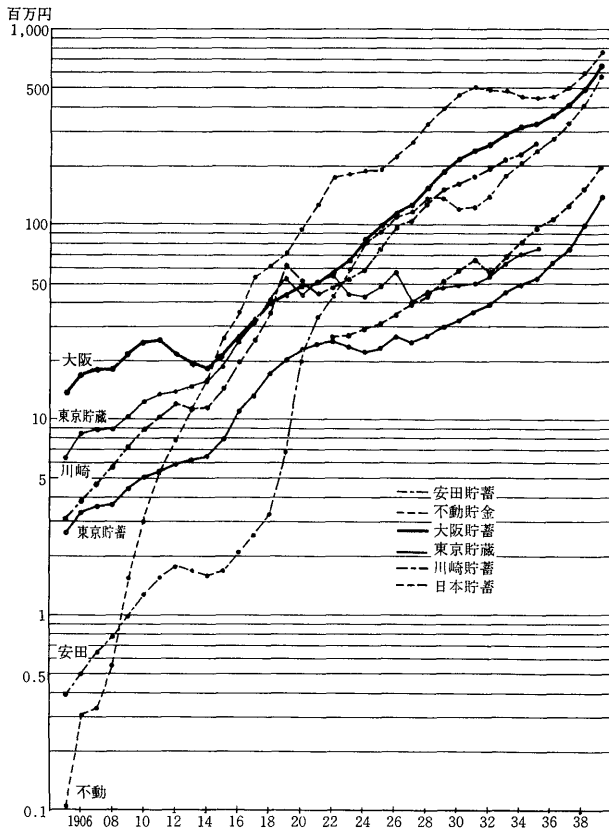
親銀行である明治商業銀行は一八九六（明治二九）年六月に設立された。安田善次郎は当初から設立計画に関与したが、その事情を『安田善次郎全伝』は次のように記している。<sup>(2)</sup>

明治二十九年善次郎君は又明治商業銀行創立に従事した。抑も同銀行設立の機縁は金沢市の名望家平野小平、阿部太右衛門、齋藤彌久氏等の希望があったからである。由来金沢市は加州銀行、米谷銀行、平野銀行等の小銀行又は無尽業者等多く、従って金利も亦高かった。そこで

有力なる大銀行家の出現は必要でもあり又望まじきものであった。善次郎君は此希望の至当なるに同感し遂に以上の諸氏並に安田善四郎、安田忠兵衛氏等と謀り資本金を二百万円とし、資金は安田家並に金沢側にありては前田侯を主とし前記諸氏と一般公募によるもの等にて大約折半醸出の案を立て創立に着手したのである。而して此間本店設置の場所につき金沢側にありては同地を主張し、東京側にありては東京を主張する等のことあり、資本総額に就きても一二の異論あり結局種々の紆余曲折を経て遂に創立事務所を日本橋区小舟町安田銀行内と石川県金沢市とに設立し、三月二十八日明治商業銀行設立認可申請書、目論見書、定款等を大蔵省に提出した。

安田貯蓄銀行と安田財閥

第1図 7大貯蓄銀行の預貯金残高推移



出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』巻末表より作成。

然るに此創立事務進行中東京米穀取引所が其機関銀行設立の計画を中止し、明治商業銀行株式六十二万五千円に相当するものを引受け、其代償として特に米穀取引所の便宜を計るべしとの約束成立したるを以て、同年六月資本金を更らに参百万円に増加すること、なり其変更申請をしたのであった。これは従来目論見たる資本放下区域が此の取引所との約束の結果大に拡大さるゝ事となつたので、改めて増資の必要が起つたからであつた。

以上より、明治商業銀行の設立主体が安田財閥、旧藩主前田家および金沢市の有力者、東京米穀取引所の三者であったことがわかる。そして、設立をめぐるのは安田と金沢側との間に齟齬が生じたようであるが、その詳細を明らかにする史料は現存しない。金城貯蓄銀行はこの齟齬を調整するための機関として途中から計画に加えられたものようである。『安田保善社とその関係事業史』は金城貯蓄銀行について、「明治商業銀行が前田家と安田家を中心として設立過程にあったとき、本店位置、行名問題が論議の的となったので、その緩衝帯として普通銀行たる明治商業とは別個に、当行の設立が計画されたわけであった」と述べている<sup>(3)</sup>。同行は明治商業銀行設立直後の一八九六年九月に設立され、本店を金沢に置いた。両行は同一店舗、同一行員を用い、明治商業銀行本店は金城貯蓄銀行東京支店を兼ね、金城貯蓄銀行本店は明治商業銀行金沢支店であった<sup>(4)</sup>。資本金は明治商業銀行三〇〇万円（払込資本七五万円）に対し、金城貯蓄銀行は一〇万円（払込資本二万五〇〇円）にすぎなかった。また、設立時の金城貯蓄銀行の頭取は明治商業銀行頭取安田善助であり、金城貯蓄銀行の役員五名（頭取安田善助、取締役平野小兵衛、片山遠平、監査役水登勇太郎、斎藤彌久）はいずれも明治商業銀行役員を兼ねていた（第四表）。このように、金城貯蓄銀行は名目上は独立した銀行であったが、実質的には明治商業銀行の貯蓄部と言って良い。上記の設立経緯から見る限りでは、金城貯蓄銀行の設立は安田善次郎の積極的意志から出たものとは認められない。

次に金城貯蓄銀行時代の経営内容を分析したい。この時代は一九〇六（明治三九）年六月の本店の東京への移転によって、二つの時期に区分できる。前半の時期においては金沢系株主との関係が、後半の時期においては米穀商との関係が主たる局面を構成する。

第2表 金城貯蓄銀行株主（その1）

（各年末）

安田貯蓄銀行と安田財閥

株主氏名	1896	1897	1899	1904	1908	1909	1911	1915
	株	株	株	株	株	株	株	株
1. 安田善次郎	100	100	100	300	300	300	300	300
2. 安田善三郎	—	—	—	—	—	200	200	200
3. 安田善四郎	100	300	300	300	300	200	200	200
4. 安田善助	300	500	500	200	300	200	400	400
5. 安田善彌	—	—	—	200	200	200	200	200
6. 安田善之助	—	—	—	—	—	200	200	200
7. 武井守正	100	100	100	200	200	200	200	200
8. 金原磊	—	—	—	100	—	—	—	—
9. 長谷川千蔵	—	—	—	—	200	200	—	—
10. 佐藤小一郎	—	—	—	—	—	—	—	100
11. 浅野総一郎	100	—	—	—	—	—	—	—
12. 馬場道久	100	—	—	—	—	—	—	—
13. 前田利嗣	500	500	500	—	—	—	—	—
14. 南郷茂光	—	—	—	200	200	—	—	—
15. 片山遠平	100	100	100	—	—	—	—	—
16. 斯波蕃	—	—	—	200	—	—	—	—
17. 小川良太郎	—	—	100	100	100	100	100	—
18. 平野小兵衛	100	100	100	—	—	—	—	—
19. 石浦三郎平	100	—	—	—	—	—	—	—
20. 阿部太右衛門	100	—	—	—	—	—	—	—
21. 水登勇太郎	100	100	100	—	—	—	—	—
22. 斎藤彌久	100	100	—	—	—	—	—	—
23. 米倉一平	100	100	100	—	—	—	—	—
24. 中村清蔵	—	—	—	200	200	200	200	200
合計	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
内訳								
安田系 1~10	600	1,000	1,000	1,300	1,500	1,700	1,700	1,800
前田・金沢系13~22	1,100	900	900	500	300	100	100	—
米穀商 23~24	100	100	100	200	200	200	200	200

注1. 1900~1903, 1905~1907年は不明。

2. 1897~98, 1909~10, 1911~14, 1915~16年は、それぞれ株主構成が同じなので、各1年度ずつ採った。

出典：金城貯蓄銀行 各期『営業報告書』（原本）より作成。



金沢系株主と安田財閥との関係については山路愛山『現代金権史』が次のように記している。<sup>(6)</sup>

元来明治商業銀行は加州侯の金を基礎として作りたるものなり。加越能は加州侯の旧領地にして同地には今も旧臣多し。此人々の相談にて加州侯を大株主とし、旧臣もそれ／＼株を持ち、北陸道に金融機関を作らんと評議し、始めは金沢に本店を置き、富山其外に支店を置く積なりしに、斯様の相談には是非とも安田を加へねばならずとあって其趣を安田氏に通じたるに、安田氏は根が加州の支藩富山侯の家臣の子なれば勿論加盟致すけれども北陸は交通機関の発達せざる所にて不便少からず。当分の内は本店を東京に置かれ候方然るべしと言出したり。東京に本店を置くは発起者の素志にあらざれば是には随分異論ありたれども、何分安田氏の説なれば人々の信用も重く、其上安田氏は別に資本金三万円の金城貯蓄銀行と云ふものを立て其本店を明治商業銀行の金沢支店に置き、東京の明治商業銀行本店内に其支店を置き、二行恰も一体の如くにし資本金は三万円なれども金の融通はいくらでも致すべしと暗示したれば銀行を立て、重役になりたき連中も金城貯蓄銀行の重役たるに其渴を医し、それにて異論の火の手も滅じたる故、思の通り本店は東京に置くこととなり、払込の金は尽く本店に巻き上げたり。

この記述の当否を明らかにするために若干の客観的なデータを提出したい。

明治商業銀行の創立時の株式所有は確めえなかつたので、一八九八（明治三一）年末の一〇〇〇株以上の主要株主を見ることにしたい（第一表）。株数では安田系と前田・金沢系はほぼ拮抗しており、米穀商は米倉一平のみ<sup>(5)</sup>があがっている。また設立時の役員は、安田系は三名、前田・金沢系は四名、米穀商は一名で、残り一名の阿部彦太郎は不明である。

金城貯蓄銀行の株式は、設立当初は金沢系が半分以上の一〇〇〇株を占めていたのに対し、安田系は六〇〇株にすぎなかつた（第二表）。役員は、頭取の安田善助のみが安田系で、取締役二名、監査役二名はいずれも金沢系

第3表 金城貯蓄銀行株主（その2）

（各年末）

安田貯蓄銀行と安田財閥

株主氏名	1918	1919	株主氏名	1918	1919
1. (名)保善社	100株	300株	20. 安田福四郎	50株	150株
2. 安田善三郎	100	330	21. 安田一雄	50	150
3. 安田善四郎	100	330	22. 鈴木安太郎	50	180
4. 安田善助	100	330	23. 金原 磊	50	170
5. 安田善彌	100	330	24. 佐藤小一郎	50	170
6. 安田善五郎	100	330	25. 若菜福朗	—	30
7. 安田善雄	100	330	26. 山沢平太郎	—	30
8. 安田善衛	100	330	27. 小笠原鏗次郎	—	20
9. 安田善兵衛	100	330	28. 飯田武也	—	20
10. 安田善之助	100	330	29. 斎藤 恂	—	20
11. 安田善造	100	300	30. 桜井梅太郎	—	20
12. 安田楠雄	100	300	31. 小倉鎮之助	—	20
13. 安田孝一郎	100	300	32. 永瀧久吉	—	20
14. 安田彌三郎	100	—	33. 藪田岩松	—	20
15. 安田良吉	—	300	34. 近藤重三郎	—	20
16. 安田岩次郎	100	300	35. 菅原大太郎	—	20
17. 安田彦太郎	100	300	36. 甲 順	—	20
18. 安田 一	100	300			
19. 安田周三郎	50	150	合 計	2,000	6,600

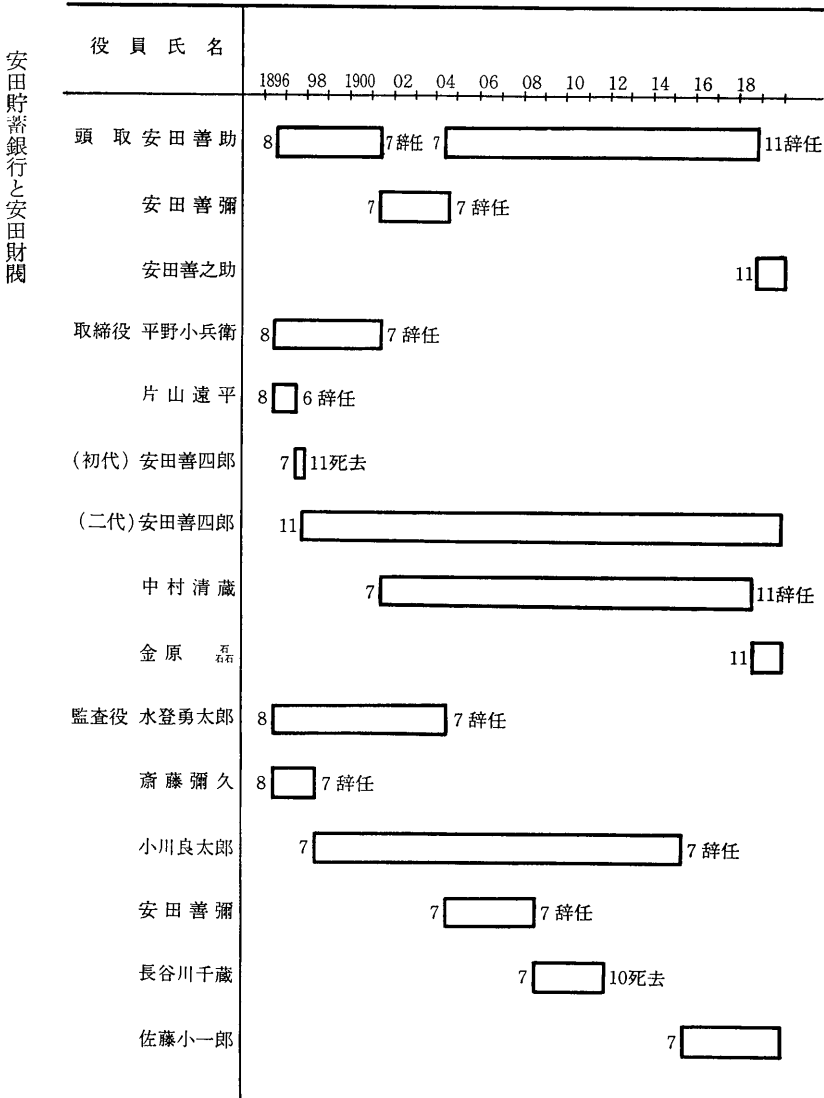
出典：第2表と同じ。

で占められていた。それが翌一八九七年には早くも安田系所有高（一〇〇〇株）が金沢系（九〇〇株）と伯仲し、一九〇四年になると安田系の割合は圧倒的となった。役員についても、一八九四年末には役員五名中、頭取安田善助、取締役安田善四郎、監査役安田善彌の安田系に対し、金沢系は監査役小川良太郎一名で、残る一名の取締役を米穀商の中村清蔵が占めた（第四表）。

このように設立後数年の内に金城貯蓄銀行は安田の支配下に入り、親銀行である明治商業銀行においても同様の変化があったと思われるが、その転換の契機は一九〇〇〇一年の恐慌だったのでなかつたらうか。

金沢系株主の中には、旧藩主前田利嗣

第4表 金城貯蓄銀行役員の推移



出典：金城貯蓄銀行 各期『営業報告書』（原本）より作成。  
 注：数字は月を示す。

第5表 明治商業銀行金沢支店貸出の推移  
(単位：千円)

年 間	貸 出	割引手形	荷為替手形
1896(明治29)	102	51	16
97( 30)	421	1,142	92
98( 31)	754	1,095	145
99( 32)	4,127	31	314
1900( 33)	...	...	...
01( 34)	...	...	...
02( 35)	2,433	1,279	424
03( 36)	177	94	539
04( 37)	305	1,826	1,667
05( 38)	1,934	1,823	1,342
06( 39)	860	1,501	1,817
07( 40)	742	2,600	1,093

注：年間貸出高。

出典：石井寛治「福井・石川絹織物業と金融」山口和雄編『日本産業金融史研究 織物金融篇』(1974年)所収、698～699頁。(原史料は石川県『県統計書』、『金沢市勸業統計概覧』、『金沢市統計書』)

安田貯蓄銀行と安田財閥

(その養子が利定)・南郷茂光(貴族院議員・元海軍主計大監)・斯波蕃(男爵・旧金沢藩家老)・片山遠平・小川良太郎の東京在住の前田家旧家臣と、平野小平・阿部太右衛門・斎藤彌久・水登勇太郎(金沢商業会議所会頭)の金沢市在住の実業家の二つのグループが存在した。金沢の実業家が恐慌を境に姿を消していることに注目したい。この恐慌の状況を『石川県史』は、加州銀行に触れた部分で次のように述べている。

然るにこの年(明治三〇年——引用者)より経済界の趨勢は一頓挫を来し、市内の同業界に頭角を露はせる才明・平野・桜谷三銀行は、生糸羽二重の惨落による打撃を受けて取引を停止し、之と関連せる加州銀行は、十二銀行金沢支店及び明治商業銀行金沢支店と共に、一大痛捧を喫したりき。後三十四年七月平野・桜谷二行破産し、才明銀行は四十年の頃に

至るまで纒かに営業を続けしも、固より金融機関たる機能を發揮し得ず。加州銀行も亦到底業勢の挽回を期し得べからざるが如く見られたり。(傍点は引用者)

引用中文に見られる平野銀行は金城貯蓄株主平野小平の所有する銀行で製糸金融にたずさわっていた(一八九一年設立)。恐慌による金沢系株主の没落が彼らが株主から脱落した理由ではなからうか。

一九〇〇～〇一年恐慌以前は明治商業銀行金

第6表 金城貯蓄銀行預金残高本支店別 (単位：千円)

年 末	金 沢	東 京	四 谷	本 郷	本 所	芝	神 田	深 川	浅 草	白 金	松 本	合 計
1896(明治29)	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
97( 30)	13	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27
98( 31)	18	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	35
99( 32)	25	36	—	—	—	—	—	—	—	—	—	62
1900( 33)	27	93	—	—	—	—	—	—	—	—	—	121
01( 34)	20	126	—	—	—	—	—	—	—	—	—	147
02( 35)	24	164	—	—	—	—	—	—	—	—	—	189
03( 36)	28	232	—	—	—	—	—	—	—	—	—	261
04( 37)	34	277	—	—	—	—	—	—	—	—	—	312
05( 38)	38	355	—	—	—	—	—	—	—	—	—	394
06( 39)	39	464	—	—	—	—	—	—	—	—	—	504
07( 40)	38	594	5	6	—	—	—	—	—	—	—	644
08( 41)	45	680	18	19	—	—	—	—	—	—	—	764
09( 42)	67	786	30	41	—	—	—	—	—	—	—	978
10( 43)	105	966	49	66	21	13	—	—	—	—	—	1,274
11( 44)	128	1,168	63	74	25	35	8	—	—	—	—	1,564
12(大正1)	142	1,316	61	98	30	55	16	—	—	—	—	1,784
13( 2)	146	1,237	56	79	28	56	20	—	—	—	—	1,698
14( 3)	107	1,157	57	81	26	58	19	—	—	—	—	1,600
15( 4)	120	1,145	52	86	29	64	23	—	—	—	—	1,641
16( 5)	162	1,361	62	126	44	87	36	—	—	—	—	2,054
17( 6)	209	1,725	84	161	64	134	40	—	—	—	—	2,662
18( 7)	250	2,082	99	184	77	113	50	—	—	—	—	3,159
19( 8)	260	3,519	130	401	409	324	62	380	501	328	366	6,685

出典：金城貯蓄銀行『営業報告書』(原本)より作成。

安田貯蓄銀行と安田財閥

第7表 明治商業銀行金沢支店滞貸金

(1902年9月現在)

貸出先	職業	金額	貸出種類	担保
1. 大鋸谷 太三郎	製糸業	31,750円	貸付金	不動産
		24,040	割引手形	繭
2. 長 連 篤	織物業	3,600	貸付金	不動産
		7,704	割引手形	信用
3. 横 浜 茂 平	紙 商	900	貸付金	不動産
		1,000	割引手形	不動産
4. 島 林 延次郎	…	10,000	貸付金	生糸
		5,780	”	不動産
5. 石 崎 達 治	…	11,180	”	不動産
6. 綿 野 源 二	…	2,600	割引手形	信用
7. 平 野 銀 行	銀行業	3,000	”	…
8. 神 野 良	…	3,700	”	株 式
9. 若 林 孫四郎	…	8,350	”	生糸・羽二重
10. 村 山 四郎平	鋳物業	6,008	”	不動産・信用
11. 金 丸 宅次郎	…	7,150	”	不動産・信用
12. 小 森 富 次	…	2,600	”	不動産
13. 金沢絹糸株式会社	製糸業	13,375	”	生糸・信用
14. 第百二十二銀行	銀行業	1,155	為替尻貸	…

安田貯蓄銀行と安田財閥

注：第百二十二銀行は本店桑名所在。1901年1月に同行が支払停止をしたため滞貸が生じた。

出典：明治商業銀行金沢支店『事務引継書』（明治35年9月）より作成。

沢支店は主として織物業に対し積極的な貸出を行っていた。同店の年間貸出高を石井寛治氏作成の表で見ると、支店開設以降急速に増大して一八九九年にピークに達したのち、一転して一九〇三年まで激減するという特徴的なカーブを見てとることができる（第五表）。石井氏は、明治商業銀行「金沢支店の開設は、石川機業に対して金融の中心地東京からの有力な資金パイプが敷設されたことを意味していたといえよう」と述べている。東京から金沢への資金の移動がどの程度あったかは明らかにしえないが、明治商業銀行金沢支店の貸出額の急増と子銀行金城貯蓄銀行本店の資金吸収力の低さ（一

九〇〇年の預金残高二万七〇〇〇円を見れば資金移動があったことはほぼ疑い得ないであろう(第六表)。石川県の日歩四銭(一四・六%)にも達する高金利がその誘因だったと思われる<sup>(11)</sup>。恐慌による多額の固定貸の発生と、恐慌後の低金利、特に前者が恐慌後の貸出の消極化をもたらした<sup>(12)</sup>。一九〇二年九月現在の明治商業銀行金沢支店の滞貸金は一四万四千円にのぼっていた(第七表)。滞貸金の大部分は織物業・製糸業に関係したものであった。以上の経過から見て、当初から安田が資金吸収を目的に銀行を設立したとすることはできないだろう。それは、地方産業で有利な貸出先が存在すれば、積極的に貸出すという大合同(一九二三年)前の安田銀行のビヘーヴィアとも一致する<sup>(13)</sup>。積極的政策といっても、安田は自らのイニシヤティブによることを目的としていたのであり金沢の店舗の独立化を企図したのではない。それは、安田善次郎が一九〇八年十二月に日本商業、明治商業、第三の三行合併を企画していたことからしても知ることができよう<sup>(14)</sup>。

それと同時に明治商業銀行設立当初は地元役員の経営への独自の参加によって金沢支店がかなり独立的に運営されていたようである。子銀行である金城貯蓄銀行は、一九〇〇〜〇一年恐慌前に県内の諸銀行と代理店契約を結び、資金の吸収を図った(第八表)。代理店契約が一九〇六年までは本店と支店でそれぞれ別個に行なわれており、東京支店は一九〇九年以降安田系銀行と次々に代理店契約を締結した。しかし、預金吸収は恐慌による銀行の破綻の影響もあって思わしくなく、東京支店が本店をはるかに凌駕してしまった(第六表)。

金沢の産業界の不振から、明治商業銀行および金城貯蓄銀行は当地での活動に消極的となった。石川県最大の銀行、加州銀行からの救援要請も拒否した<sup>(15)</sup>。一九〇六年九月には金城貯蓄銀行の本店を東京へ移した。明治商業、金城貯蓄両行の株主・役員として前田家関係者は残ったが<sup>(16)</sup>、もはや金沢は金融活動の中心ではなくなった。

第8表 金城貯蓄銀行代理店契約

(1896~1901年)

安田貯蓄銀行と安田財閥

本店(金沢)			東京支店		
代理店名	契約	解約	代理店名	契約	解約
平野銀行小松支店	1897. 8	1898. 5	安田銀行秋田支店	1899. 7	継 統
小松銀行	1898. 6	1906. 2	" 福島支店	1899. 9	"
平野銀行	1898. 10	1901. 7	" 宇都宮支店	"	"
才明銀行	"	1899. 7	" 郡山支店	1899. 12	"
平野銀行 大聖寺支店	1899. 1	1901. 7	" 若松支店	"	"
松任銀行	1899. 3	1906. 2	" 中村支店	"	"
才明銀行片町支店	1899. 7	1901. 10	" 盛岡支店	"	"
美川銀行	1901. 2	1906. 1	" 青森支店	"	"
			" 横手支店	"	"
			第三銀行松江支店	1900. 4	"
			" 函館支店	"	"
			" 鳥取支店	"	"
			" 米子支店	"	"
			" 倉吉支店	"	"
			" 境支店	"	"
			" 今市支店	"	"
			" 西郷支店	"	"
			安田銀行 桑折出張所	"	"
			" 米沢支店	1900. 7	"
			" 川俣支店	1901. 1	1903. 4
			群馬商業銀行 伊勢崎支店	"	1916. 10
			明治商業銀行 松本支店	1901. 6	1909. 5
			群馬商業銀行 前橋支店	1901. 11	1916. 10

注：継続は、金城貯蓄銀行が安田貯蓄銀行に組織変更した時（1920年）まで、代理店契約が継続していたもの。

出典：金城貯蓄銀行 各期『営業報告書』（原本）より作成。



第9表 明治商業銀行・金城貯蓄銀行 支店網の拡大

安田貯蓄銀行と安田財閥

明 治 商 業		金 城 貯 蓄	
年 月	事 項	年 月	事 項
1896. 6	明治商業銀行設立（本店：東京）	1896. 9	金城貯蓄銀行設立（本店：金沢）
10	金沢支店開業	1997. 2	東京支店開業
1900. 9	信濃金融銀行合併（松本支店開業〔10月〕）	1906. 5	本店東京に移転（旧本店は金沢支店となる）
1907. 2	四谷支店開業	1907. 2	四谷支店開業
9	本郷支店開業	9	本郷支店開業
1909. 2	本所支店開業	1909. 2	本所支店開業
		5	松本支店開業
1910. 6	芝支店開業	1910. 6	芝支店開業
1911. 6	神田支店開業	1911. 6	神田支店開業
1916. 9	群馬商業銀行合併（伊勢崎・前橋・高崎・桐生・藤岡・境町支店開業）		
1918. 11	浅草支店開業		
1919. 3	千住支店開業	1919. 11	中加貯蓄銀行合併（深川・浅草・白金支店開業）
1921. 3	麻布支店開業		
1922. 12	足利支店開業	1920. 1	金城貯蓄銀行，安田貯蓄銀行に改組
1923. 4	飯田町支店開業		
5	新宿支店開業		
7	牛込支店開業		

出典：明治商業銀行『沿革誌』（1923年），『安田保善社史稿本』，金城貯蓄銀行 各期『営業報告書』より作成。

明治商業銀行は、一九〇〇年九月に安田系の信濃金融銀行（一九〇〇年三月設立、資本金八〇万円）を合併して松本支店を開設<sup>17)</sup>、同行の営業範囲は東京・金沢・松本の三カ所となっていたが、一九〇六年の子銀行金城貯蓄銀行本店の東京移転以降、主として東京において積極的な経営拡大政策を展開した。すなわち、一九〇七年二月に四谷支店を開設以來、本郷・本所・芝・神田の計五支店を一九一一年までに開設した（第九表）。當時は大銀行の東京市内支店

安田貯蓄銀行と安田財閥

第10表 明治商業銀行主要勘定

(單位：千円，%)

	公称資本金 (1)	払込資本金 (2)	積立金 (3)	自己資本 (4)=(2)+(3)	預金 (5)	貸出 (6)	預貸率 (7)=(6)/(5)	有価証券 (8)	借入金 (9)	預け金 (10)
1902(明治35年)	3,800	1,400	86	1,486	2,704	3,219	119.0	1,337	556	17
03( 36 )	3,800	1,520	104	1,624	2,762	3,261	118.1	928	380	42
04( 37 )	3,800	1,520	124	1,644	2,270	3,139	138.3	1,358	781	42
05( 38 )	3,800	1,520	131	1,651	2,826	3,178	112.5	1,297	255	119
06( 39 )	3,800	1,520	138	1,658	5,147	5,838	113.4	881	280	69
07( 40 )	3,800	1,900	150	2,050	6,331	7,310	115.5	772	950	1,061
08( 41 )	3,800	1,900	170	2,070	5,779	7,399	128.0	614	1,050	814
09( 42 )	3,800	1,900	190	2,090	6,851	8,333	121.6	588	500	775
10( 43 )	3,800	1,900	210	2,110	7,803	9,217	118.1	1,201	1,480	323
11( 44 )	3,800	1,900	230	2,130	8,354	9,690	116.0	1,685	1,550	271
12(大正1年)	3,800	1,900	250	2,150	8,140	8,830	108.5	1,734	1,080	244
13( 2 )	3,800	1,900	260	2,160	7,862	8,956	113.9	1,422	1,195	226
14( 3 )	3,800	1,900	270	2,170	7,977	8,078	101.3	1,540	270	307
15( 4 )	3,800	1,900	290	2,190	9,383	8,714	92.9	1,736	600	604
16( 5 )	4,800	2,400	413	2,813	13,876	17,209	124.0	1,310	3,000	54
17( 6 )	4,800	2,400	473	2,873	18,069	16,577	91.7	3,557	1,150	107
18( 7 )	4,800	4,800	553	5,353	22,151	22,252	100.5	4,075	4,995	262
19( 8 )	10,000	6,100	760	6,860	30,643	38,518	125.7	3,961	5,438	43
20( 9 )	10,000	7,400	1,160	8,560	48,476	49,634	102.4	8,567	3,028	96
21( 10 )	10,000	8,689	1,715	10,404	57,518	49,259	85.6	18,786	2,900	135
22( 11 )	10,000	8,700	2,255	10,955	65,091	53,206	81.7	20,181	2,500	200

出典：各期「東京銀行集会所組合銀行營業景況」『銀行通信録』より作成。

の設置は稀であり、市内中小工業者の金融は中小銀行に任される部分が大きかったので、明治末期における同行の経営政策は特異だったと言えよう。<sup>(18)</sup>

この間の同行の貸出残高の推移を追うと、一九〇五年末の三一七万円が翌年にはほぼ倍増し、一九一一年末には三倍増をとげており、同行の発展ぶりがうかがわれる(第一〇表)。

一九一二年～一四年の景気後退期に同行の業績は一時悪化した<sup>(19)</sup>が、第一次大戦勃発とともに再び発展に転じた。一九一六年には安田系の群馬商業銀行を合併して上毛地方に営業範囲を拡大するとともに、一九一八年以降東京市内の支店増設も図った。

明治商業銀行は恒常的にオーバー・ローンであったがこの貸出増大に対応するため、子銀行金城貯蓄銀行の発展が図られた(第一一表)。預け金の名称で親銀行明治商業銀行へ回された金城貯蓄銀行の資金の残高は一九〇五年の二六万円が、一九一二年には四倍以上に増大した。同行は親銀行の支店をそのまま同行の支店にし、また安田系銀行支店に代理店網を拡大することにより預金吸収力を増した。明治商業銀行預金残高に対する金城貯蓄銀行預け金の比率は最大の一九一二年でも一四・一%と余り高くはないが、零細な預金者を集めることにより親銀行の預金吸集力も高めるといふ波及効果も考慮に入れておく必要がある。

さて、明治商業銀行の急成長はその内部に危機の要因を孕んでいた。その一つは恐慌の際に真先に取付の対象となるような小規模銀行との手形の代理交換を絆とする関係の緊密化であり、もう一つは米穀商中村清蔵ら投機的資本への貸出の肥大化である。

明治商業銀行は、一九〇七年二月現在では倉庫銀行・中加貯蓄銀行・実業銀行・田口銀行・六十三銀行東京支

安田貯蓄銀行と安田財團

第11表 金城貯蓄銀行主要勘定

(単位：千円、%)

年 末	公 資 本 金 (1)	私 資 本 金 (2)	積 立 金 (3)	当 期 利 益 金 (4)	自 己 資 本 (5)=(2)~(4)	預 貯 金 (6)	貸 出 (7)	有 価 証 券 (8)	預 け 金 (9)	(9)/(6)	預 け 金 明 治 商 業 預 金 %
1896(明治29)	100	25	—	0	25	3	—	1	26	866.7	...
97(30)	100	25	—	1	26	27	—	8	44	163.0	...
98(31)	100	25	0	2	27	35	—	15	46	131.4	...
99(32)	100	25	1	2	28	62	—	16	73	117.7	...
1900(33)	100	25	2	1	28	121	—	28	118	97.5	...
01(34)	100	25	2	1	28	147	—	44	129	87.8	...
02(35)	100	25	2	2	29	189	—	48	154	81.5	5.7
03(36)	100	25	4	2	31	261	—	82	191	73.2	6.9
04(37)	100	25	5	2	32	312	—	128	196	62.8	8.6
05(38)	100	25	6	2	33	394	—	161	264	67.0	9.3
06(39)	100	25	7	3	35	504	2	155	334	66.3	6.5
07(40)	100	25	9	3	37	644	1	240	297	46.1	4.7
08(41)	100	25	11	4	40	764	1	252	434	56.8	7.5
09(42)	100	25	13	4	42	978	1	301	579	59.2	8.5
10(43)	100	25	15	4	44	1,274	27	553	614	48.2	7.9
11(44)	100	25	17	4	46	1,564	40	470	937	59.9	11.2
12(大正1)	100	25	3	0	28	1,784	27	472	1,146	64.2	14.1
13(2)	100	25	3	2	30	1,698	23	464	1,069	63.0	13.6
14(3)	100	25	4	2	31	1,600	18	469	1,010	63.1	12.7
15(4)	100	25	4	5	38	1,641	26	447	1,094	66.7	11.7
16(5)	100	25	8	5	44	2,054	26	447	1,129	55.0	8.1
17(6)	100	25	12	7	44	2,662	135	617	1,434	53.9	7.9
18(7)	100	25	21	7	53	3,159	176	856	1,617	51.2	7.3
19(8)	330	127	29	9	63	6,685	372	900	3,607	54.0	11.8
			156	47	330		1,682	1,107			

出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』附表より作成。

店の五行の、一九一七年末では倉庫銀行・中加貯蓄銀行・小石川貯蔵銀行・東都家寿田銀行、六十三銀行支店の五行の代理交換を行なつており、<sup>(20)</sup>東京所在小規模銀行の親銀行となつていた。かつて、一九〇一年に同行は代理交換委託銀行愛国銀行の支払停止により、一〇万円以上の交換尻不足の被害を被り、経営に蹉跌をきたしたことがあつた。<sup>(21)</sup>一九一九年には再び倉庫銀行（頭取中村清蔵）が経営に行詰つて交換金を明治商業銀行に納入できずに、明治商業銀行から代理交換契約を解除されるという事件が起きた。この事件は『銀行通信録』の報道するところによれば次の通りである。<sup>(22)</sup>

日本橋区蛸殻町一丁目の株式会社倉庫銀行は「大正八年」六月二十一日突然臨時休業を発表したる為め取付騒ぎを惹起し、次で深川区亀住町の株式会社中加貯蓄銀行も其影響を受けて二十三日同じく取付に遭遇せり。倉庫銀行は明治三十五年二月の創立に係り現在資本金六十万円（全額払込済）積立金九万七千五百円にして預金八百四十万円、貸出千万円を有し頭取中村清蔵、専務取締役中村郁次郎、支配人金谷藤次郎氏等の重役を以て経営し来り、主として株式及米穀仲買筋を取引先としたるが、六月二十一日の手形交換に際し同行受入手形三百二十枚此金額二百八十七万六千八百三十七円九十銭に対し親銀行たる明治商業銀行に交換資金を納入すること能はざりし為め明治商業銀行にては右の手形を夫々持出銀行へ返還すると共に代理交換を解除することとなり、其結果倉庫銀行は己むを得ず支払を停止し臨時休業を発表するに至れり。而して此事世間に伝はるや預金者は続々銀行に詰め掛け一時非常の雑踏を極めしが、翌二十二日に至り銀行当事者は預金者総代に対し七月二日迄臨時休業すること、千円以下の預金は開業と同時に其全部を払戻すこと、千円以上の預金は更に協議の上適當の措置を取ること等を声明したる為め漸く沈静に帰し、爾後銀行にては某有力会社の後援に依り明治商業銀行との間に資金融通の交渉整ひ予定の通り七月三日を以て開業の上、千円以下の預金に対しては同日より七日迄に其全部を払戻し、又千円以上の預金に対しては七月九日より十二日迄に其三割を払戻し残額は貸付金の回収を俟て漸次之を

第12表 明治商業銀行貸出担保別残高

(単位：千円，%)

担 保	1916. 12	1917. 6	1918. 12	1919. 12	1920. 12	1921. 12
国 債	302	575	869	1,290	789	1,424
外 債	98	93	56	99	8	1
地 方 債	83	41	40	120	175	214
社 債	325	392	631	525	513	1,033
株 券	7,941	11,809	13,818	23,952	24,252	30,863
商 品	1,284	1,053	1,972	2,729	2,100	2,576
土地・建物	483	497	538	1,618	1,700	1,862
財 団	65	63	196	1,186	1,314	1,463
債 権	23	156	131	524	345	547
保 証	283	253	234	340	—	83
信 用	555	447	1,022	1,811	5,589	2,668
権 利 質	—	—	—	—	—	22
合 計	11,445	15,385	19,512	34,198	36,789	42,761
全体中の 株券の割合	69.4	76.8	70.8	70.0	65.9	72.2

安田貯蓄銀行と安田財閥

注：貸出は証書貸付、手形貸付、当座預金貸越、コール・ローンの合計。残高は各月末。  
出典：明治商業銀行 各期『営業報告書』より作成。

払戻すことゝなれり。

貸出面では大戦開始の一九一四年から反動恐慌の一九二〇年までに、五倍の飛躍をとげている(第一〇表)。その貸出の内容は、貸出担保の内訳より見て、米穀取引よりもむしろ圧倒的部分は株式投機にあつたのではないかと思われる(第二二表)。

積極的政策が経営悪化に転じてゆく経緯を安田銀行『支店沿革誌』のうち八重州橋支店(旧明治商業本店)の項は次のように述べている。<sup>(23)</sup>

更ニ大正五年九月群馬商業銀行本支店六ヶ店ヲ合併シ尙百万円増資次デ大正八年五月金五百式拾万円ノ増資ヲ行ヒ都合壹千万円トナル一面市内支店ヲ続々増設スル等実ニ大正三四年以来急速ナル發展策ヲ講ゼラレタリ。而シテ支店ニテ預金ヲ吸収シ本店之ヲ消化ストノ本来ノ目的ハ遺憾ナク達セラレタルモ、本店固有ノ得意先

系統ハ官吏、株式仲買、新事業会社、魚河岸筋等ニシテ根本培養ニ資スルモノ乏シク其地位ハ概ネ二三流ニテ且安田、第三兩行の溢レ乃至之ト取引アルモノ多数ヲ占メ兎角経営上勞果相ハザル憾ミヲ免ガレズ。此間ニ於テ又々代理交換決済金ガ原因トナレル倉庫銀行及中村清藏問題或ハ富士製鋼会社ノ貸金乃至大正九年恐慌ノ影響ヲ受ケ莫大ノ固定貸ヲ生ジ之ガ整理末了ノ裡ニ大正十二年九月ノ大震災ニ遭ヒ更ニ整理困難ヲ加ヘタリ。

(中略)

大正十二年十一月、合同ト同時ニ名称ヲ江戸橋支店ト改メ旧營業所ニバラック建築ヲナシテ復帰内外整理ニ専心從事セシモ、翌十三年上半期中ハ猶混沌タル域ヲ脱セズ、漸ク整理ニ着手シタルハ十三年六月以降ニシテ、内部ノ混乱ヲ鎮定セシムルヲ第一ノ急務ト認メ、綱紀ノ肅正ヲ図ルト同時ニ事務ノ取扱ヲ内規ニ準抛スベキ様努メタリ。越テ七月中旬ヨリ債權証書ノ欠陥ヲ補充救済ニ移リ、円満ナル交渉成リ難キモノニ対シテハ訴訟ニヨリ解決スル等歴代支店長ハ専念滞貸並ニ内部整理ニ没頭シ、大正十五年ニ至リ漸ク表面整理ノ一段落ヲ告ゲタルモ、尚滞貸トシテ残存スルモノ多額ニ上ル一方、外部ヘノ進出ハ極メテ困難ノ立場ニアリ。

大正末期に至つても莫大な固定貸が残存していたことから、大戦後恐慌の打撃の大きさが窺われる。

明治商業銀行の積極策の失敗は子銀行である金城貯蓄銀行にどのような影響を与えたであろうか。前記の引用にも示されているように、倉庫銀行取付は直ちに子銀行の中加貯蓄銀行にも波及した。中加貯蓄銀行は急遽金城貯蓄銀行との合併を発表するとともに、金城貯蓄銀行から二〇〇万円の救援資金の融通を仰いだ。<sup>(24)</sup> 中村清藏との関係は余りにも緊密になつていたから、代理交換解除をした明治商業銀行も倉庫銀行に支援の手を差し伸ばさざるをえず、金城貯蓄銀行も中加貯蓄銀行の取付を防がねばならなかつたのであろう。さもなければ、倉庫、中加貯蓄両行の取付は明治商業銀行にも波及したのであろう。

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

その後の経緯は倉庫銀行と中加貯蓄銀行では異った道を辿った。中加貯蓄銀行が一九一九年一月に金城貯蓄銀行に合併されたのに対して、倉庫銀行の方はそのまま中村清蔵の手に残り、一九二一年に株式商栗原善太郎に対する為替手形一〇〇万円の支払訴訟を起すなど債権回収に努めた挙句、一九二四年九月二〇日付で新規取引停止を命ぜられ消滅した。<sup>(26)</sup>

安田が倉庫銀行を残して中加貯蓄銀行のみ合併したのは何故なのか。中加貯蓄銀行の固定貸は合計五三万円にのぼっていた。<sup>(27)</sup> 同行の払込資本が六〇万円であるから、払込資本にほぼ相当する固定貸が存在した訳である。金城貯蓄銀行は中加貯蓄銀行株式を二四万円で買取するとともに、「中加貯蓄銀行ヨリ引継ヲ受ケタル債権ニ就テハ中村清蔵氏一家ニ於テ絶対ニ責任ヲ負フモノ」とし、<sup>(28)</sup> 固定貸から株式買収金を差引いた二九万円を中村清蔵に対する保証貸に振り替えた。その他に六月に金城貯蓄銀行が貸与した救済資金の残高が一〇月現在で一三七万円あり、前者と合計すれば一六六万円にのぼった。<sup>(29)</sup> これらの貸金は容易に回収されるものではなく、払込資本六〇万円の銀行の買取としては安田にとって極めて高くついたと見るべきであろう。しかしこれは取付波及を防止するための止むをえざる出費であった。

当時中加貯蓄銀行（本店Ⅱ深川）は芝、浅草、本所、白金の四支店を有し、他方倉庫銀行（本店Ⅱ日本橋）は深川、横須賀の二支店を持っていた。安田は中加貯蓄銀行の店舗を預金吸収のために活用し、多額の固定貸を抱えて身動きがとれなくなっていた倉庫銀行をそのまま残すことを有利と判断したものと推測される。

以上、金城貯蓄銀行の経営を親銀行明治商業と関連させて分析してきたところを要約すれば次の通りであろう。明治商業銀行設立の際に、安田財閥と金沢系資本との緩衝帯として謂わば偶然的に出来た金城貯蓄銀行が、一九



〇〇〇一年の恐慌による金沢系資本の没落で金沢系資本の拠点としての意味を失った。その後、安田系資本が圧倒的優位の下に、明治商業銀行が東京を基盤に積極的経営を展開した際、金城貯蓄銀行は本店を東京に移転させて、明治商業銀行の資本需要に応えるべく預金吸収活動を強化した。明治商業銀行が大戦ブームに乗って放漫貸出に走った結果、大戦後の不況で莫大な固定貸を生じさせると、金城貯蓄銀行は、明治商業銀行の主要な貸出先であり、同行の重役でもあった中村清蔵の中加貯蓄銀行を救援して、取付が明治商業、金城貯蓄両行に及ぶことを防いだ。その結果、金城貯蓄は中加貯蓄銀行を合併したが、中村清蔵に対する固定貸も同時に負うことになった。次節で金城貯蓄銀行の安田貯蓄銀行への改組の理由を検討する訳であるが、その消極的な理由として、親銀行明治商業銀行の経営悪化をあげることができるのではないだろうか。

注

- (1) 進藤寛氏にない、独占的貯蓄銀行として不動貯金・大阪貯蓄・川崎貯蓄・日本貯蓄・東京貯蓄・東京貯蓄・安田貯蓄の七行をとる（進藤寛「地方貯蓄銀行の再編成——一県一行主義と分業主義による」朝倉孝吉編『兩大戦間に おける金融構造』〔一九八〇年〕四七四～四八七頁）。
- (2) 『安田善次郎全伝』巻五（一九二七年）七三六～八頁。
- (3) 『安田保善社とその関係事業史』（一九七四年）二〇四頁。
- (4) 同右書、二〇四頁。
- (5) 前に掲げた『安田善次郎全伝』の引用文中に、安田と前田・金沢側と「大約折半醸出の案」であったとあるから、設立時から両者拮抗していたと見て良いであろう。
- (6) 山路愛山『現代金権史』（一九〇八年）二七九～二八〇頁。

安田貯蓄銀行と安田財閥

- (7) 人事興信所編『人事興信録』（一九〇三年）および、前掲『安田善次郎全伝』巻五、七二五、七三六頁による。
- (8) 『石川県史』第四編（一九三一年）七三三頁。なお文中では一八九七年より景気が崩落したように書いてあるが、一九〇〇年とした方が正しいと思われる。
- (9) 『北陸銀行史』（一九七八年）九〇〇頁。
- (10) 石井寛治「福井・石川絹織物業と金融」山口和雄編『日本産業金融史研究 織物金融篇』（一九七四年）七〇六頁。
- (11) 同右書、七二七頁。
- (12) 石井寛治氏も、「県外銀行支店としては、三〇年前後に金沢へ進出した明治商業銀行支店と大和田銀行支店は、三年恐慌で『大損失』を蒙って織物金融へ消極的となり」と述べている（同右書、七二二頁）。
- (13) 拙稿「戦前期日本における都市銀行と地方金融——安田銀行支店網とその系列銀行に関する分析」『金融経済』一五四号（一九七五年一〇月）参照。
- (14) 『全伝巻五』に「（明治三二年二月）七日は午前十一時より有馬市太郎、秋山忠直の両氏及び武井、善三郎、原田の三氏と偕楽園に会し、日本商業銀行、明治商業銀行を第三銀行に合併の内談をした」（七七九頁）とある。
- (15) 前掲、石井論文、七一七頁。なお、『安田善次郎全伝』巻五には、「（明治二九年）五月七日午後三時から今村勇次郎、渡辺正礼氏と前田家の加藤、斯波、片山の三氏を招き明治商業銀行へ加州銀行合併の件に関して相談した」（七二九頁）とあり、明治商業銀行設立計画中にも加州銀行との合併の話があったことがわかる。
- (16) 明治商業銀行の一九一六年末の「株主名等」では、前田利為（九二〇〇株）等頭株主、前田利同（七〇〇株）、南郷次郎（二〇一〇株）、南郷茂光の子）が前田家関係者から上位株主に現われている（以上の合計で全株式の一一・四％）（拙稿「安田財閥と地方銀行」朝倉孝吉編『兩大戦間における金融構造』所収、三二四頁参照）。また、前田利定は一九一二年から一九二二年まで明治商業銀行の取締役であった。

他方、金城貯蓄銀行については、前田利嗣の名は一九〇四年以降は株主名簿から姿を消すが、小川良太郎は一九一三年まで株主であり、一九一五年まで監査役を勤めた。『安田保善社とその関係事業史』の「三七年には前田家の後退によって全株式が安田関係者によって占められた」（二〇五頁）との指摘は正しくない。

(17) 『安田保善社とその関係事業史』は信濃金融銀行に關し、「当行に關する資料はまことに乏しく、設立事情等が明確でない」（二七三頁）としているが、安田銀行第一業務課編『支店沿革誌』（一九三五年）〔富士銀行蔵〕の松本支店の項にその間の事情が記されているので左に引用しておきたい。

「(イ)株式会社信濃金融銀行ノ創立

明治初年廢藩置縣ニ設置ノ当地筑摩縣（後ニ長野縣ニ合併）ハ創立以來産業開發ニ努メ明治五年十一月国立銀行條例制定並ニ全九年八月同條例改正セラル、ヤ民間ニ逕通、第十四銀行ヲ設立セシメ金融機關トシテ産業開發ノ資ニ供セシメタリ。

爾來幾多ノ銀行設立セラレシモ明治三十年頃日清戰役後ノ經濟界變動ニ遭遇シ過半ハ非境裡ニ消滅シ一、二存続スレ共辛クモ營業ヲ統クルノ狀況ニ在リ。此機ニ乘ジ北信地方銀行ハ支店設置ヲ目論ムニ至リタレバ当地方有志ハ相計リテ明治三十三年三月二十八日資本金八十万円ヲ以テ株式会社信濃金融銀行ヲ設立シ店舗ヲ長野縣東筑摩郡松本町大字南深志荅番地即本町一丁目千歳橋際東側ニ置キ伝手ヲ求メテ安田系ノ後援ヲ得武井守正男ヲ頭取トシ牧又次郎（松本市本町）飯田福次郎（南安曇郡高家村 酒造業）寺村治郎衛（市内本町一丁目 質貸業）小沢豊三郎（東筑摩郡塩尻町 農）ノ諸氏取締役タリ。

(ロ)株式会社明治商業銀行松本支店ノ設置

然シテ株式会社信濃金融銀行ハ安田系ノ後援ヲ援ヲ受クルニ至レリト雖モ尚經營上ニ不便尠カラザリシモノ、如ク明治三十三年五月株主並ニ預金者間議論騒然タル中ニ当地株主中ヨリ重役ヲ選任セシムル条件ヲ以テ東京ニ本店ヲ

安田貯蓄銀行と安田財閥

安田貯蓄銀行と安田財閥

有スル安田系株式会社明治商業銀行（明治二十九年設立當時資本金三百万円）ニ合併解散ノ決議ヲナシ全年九月十八日解散登記ヲ了シ明治商業銀行ハ全二十一日支本設置ノ登記ヲナシ全行ノ營業権一切ヲ繼承シ十月一日ヲ以テ開店当地ニ其營業権ヲ確立セリ。

（中略）

尚旧株式会社信濃金融銀行株主中ヨリ選任セラレン平林行雄（東筑摩郡生坂村 農）田多井喜源次（市内土井尻町 弁護士）ノ諸氏ハ大合同ニ至ル迄重役タリキ。」

(18) 前掲『支店沿革誌』の本郷支店（一九〇七年九月開業）の頃は、「当時一流銀行ニシテ東京市内ニ支店ヲ設置セルモノ一モアル無ク是ヲ以テ嚆矢トナシ是ガ経営ノ如何ハ一般財界人注視ノ焦点タリキト聞及ベリ」と記している。

(19) 前掲拙稿「安田財閥と地方銀行」参照。

(20) 東京手形交換所『創立滿二十年紀念 東京手形交換所沿革大要』（一九〇七年）一五頁。東京交換所『第四六回成績報告』（大正六年下半年期）一四頁。

(21) 前掲『支店沿革誌』のうち八重洲支店の項。

(22) 『倉庫、中加貯蓄銀行取付』『銀行通信録』四〇五号（一九一九年七月）九三五頁。なお、取付の原因として『日本銀行調査月報』大正八年六月は、倉庫銀行が数百万円を貸付けた荻野某の没落と、二、三百万円を貸付けた株式仲買人栗原善太郎の空小切手の発行をあげている（『日本金融史資料 明治大正篇』第二〇巻、一一八六頁）。

(23) 前掲『支店沿革誌』のうち、八重洲橋支店の項。

(24) 前掲『倉庫、中加貯蓄銀行取付』。なお、この記事によれば中加貯蓄銀行と金城貯蓄銀行との合併はかねてより懸案中であつたらしい。

(25) 『倉庫銀行手形訴訟事件』『銀行通信録』四二八号（一九二一年六月）七五六頁。

(26) 「銀行界の整理」 『銀行通信録』 四六五号（一九二四年一〇月） 四三二頁。

(27) うち、倉庫銀行への預け金、公債貸合計約三〇万、中村清蔵への貸付の担保不足分約二〇万円であった（元金城貯蓄銀行本店『諸勘定書抜書』（大正九年二月二十八日現在（「橋大学蔵」） 附属の「演述書」）による。

(28) 同右史料。

(29) 『金城貯蓄銀行本店事務引継書』（大正八年拾日拾参日現在）による。そのうち、七五万円は明治商業銀行で再割引されていた。なお、翌年安田貯蓄銀行に組織替えした折には中加貯蓄銀行固定貸の振替分二九万円を残すのみとなっているが、それは他の中村清蔵への貸出が明治商業銀行に移されたためではないかと思われる（前掲『諸勘定書抜書』）。

### 三 金城貯蓄銀行から安田貯蓄銀行へ

前節では金城貯蓄銀行の経営を親銀行明治商業銀行との関連で分析したが、一九二〇年の安田貯蓄銀行成立以前において、安田財閥全体は貯蓄銀行部門をどのように位置づけていたのであろうか。

これを二つの点から検討する必要がある。第一は金城貯蓄が代理店網を通じて安田系各銀行とどの程度密接に結びついていたかであり、第二は安田系諸行が独自に行なっていた貯蓄銀行業務はどの程度の規模のものであったのである。

貯蓄銀行が預金吸収をはかる目的で普通銀行の店舗に貯金取扱事務を委託する場合、この店舗を代理店という。金城貯蓄銀行は設立後間もない一八九九年頃から積極的に代理店網を拡大し、その数は一九〇〇年には二四店、

第13表 金城貯蓄銀行・安田貯蓄銀行 支店・代理店数

年 末	支店数	代理店数	支店増減府県別
1896(明治29)	1	0	東京(1)
97( 30)	1	1	
98( 31)	1	3	
99( 32)	1	14	
1900( 33)	1	24	
01( 34)	1	26	
02( 35)	1	28	
03( 36)	1	28	
04( 37)	1	28	
05( 38)	1	30	
06( 39)	1	30	金沢(1), 東京(-1), 本店, 東京へ移転
07( 40)	3	34	東京(2)
08( 41)	3	37	
09( 42)	5	39	東京(1), 長野(1)
10( 43)	6	41	東京(1)
11( 44)	7	46	東京(1)
12(大正 1)	7	54	
13( 2)	7	57	
14( 3)	7	58	
15( 4)	7	68	
16( 5)	7	71	
17( 6)	7	76	
18( 7)	7	78	
19( 8)	10	96	東京(3)
20( 9)	17	99	東京(4), 神奈川(2), 愛知(1)
21( 10)	22	101	北海道(1), 神奈川(4), 京都(1), 大阪(1)
22( 11)	35	173	青森(1), 東京(9), 神奈川(3)
23( 12)	35	155	
24( 13)	43	160	東京(6), 大阪(1), 福岡(1)
25( 14)	52	141	宮城(1), 東京(3), 静岡(1), 大阪(1), 福岡(3)
26(昭和 1)	52	151	
27( 2)	54	147	東京(1), 兵庫(1)
28( 3)	57	113	東京(2), 京都(1), 大阪(2), 福岡(-2)
29( 4)	57	100	
30( 5)	57	※ 99	
31( 6)	57	※ 74	
32( 7)	57	…	
33( 8)	57	…	
34( 9)	57	…	
35( 10)	57	…	
36( 11)	57	0	
37( 12)	59	0	東京(2)
38( 13)	65	0	東京(6)
39( 14)	67	0	東京(2)
40( 15)	67	0	
41( 16)	68	0	東京(1)

安田貯蓄銀行と安田財閥

注1：支店には出張所も含む。

2：代理店の※は上期末。

3：…は不明。

出典：金城貯蓄銀行 各期『営業報告書』(原本), 安田貯蓄銀行 各期『営業報告書』(原本), 大蔵省銀行局『銀行総覧』より作成。

第14表 金城貯蓄銀行代理店勘定

(1919年10月13日現在)

安田貯蓄銀行と安田財閥	代理店 委託銀行	貯金積金 (1)	代理店 預け金 (2)	(2)/(1) (3)	代理 店数	代 理 店 名
		円	円	%		
	安 田	820,463	103,598	12.6	19	宇都宮 仙台 福島 若松 郡山 桑折 喜多方 中村 盛岡 青森 米沢 酒田 秋田 横手 角館 鷹巣 花輪 本荘 山形
	第 三	322,427	34,876	10.8	14	函館 横浜 大阪 堀江 九条 堂島 松江 今市 西郷 鳥取 倉吉 境 米子 土佐堀
	日本商業	14,765	927	6.3	2	小樽 柳井
	京 都	221,439	203,509	91.9	6	京都 西陣 伏見 武生 鯖江 粟田部
	根 室	72,577	7,633	10.5	11	根室 釧路 厚岸 霧多布 池田 帯広 浦河 野付牛 網走 紋別 斜里
	十 七	43,561	38,225	87.8	5	福岡 久留米 小倉 直方 後藤寺
	第九十八	114,854	14,007	12.2	19	千葉 津田沼 東金 横芝 成田 六軒 八日市場 船橋 八幡 木 更津 北条 一宮 長者 大原 勝浦 庁南 茂原 鳴川 吉尾
	第三十六	7,890	7,735	98.0	1	大宮
	明治商業	...	...	...	9	浅草 千住 伊勢崎 前橋 高崎 藤岡 桐生 細ヶ沢 境
	合 計	1,618,026	410,545	25.4	86	

注：明治商業銀行支店に置かれていた代理店は支店並に扱われていたため、代理店勘定にはあらわれてこない。

出典：『金城貯蓄銀行本店事務引継書』（大正8年10月13日現在）、金城貯蓄銀行『第47期営業報告書』（大正8年下期）〔原本〕より作成。

安田貯蓄銀行と安田財閥

一九一〇年には四一店、安田貯蓄銀行への改組直前の一九一九年には九六店にのぼった（第一三表）。代理店は最初は安田系以外の石川県所在銀行にも置かれたが、前節で述べたように一九〇六年までには石川県所在銀行との代理店契約は解除され、それ以降の委託先は安田系銀行のみとなった。一九一九年一〇月現在八六の代理店が安田、第九十八、第三、根室、明治商業、京都、十七、日本商業、第三十六の安田系九行の支店網を通じて全国各地に配置されていた（第一四表）。金城貯蓄銀行が結んだ代理店契約の約定書の一例を示せば次の通りである。

約 定 書

株式会社金城貯蓄銀行ハ群馬県佐野郡伊勢崎町本町一丁目株式会社群馬商業銀行ニ代理店ヲ委托スルニ付左ノ条項ヲ契約ス

第一条 代理店ハ株式会社金城貯蓄銀行ガ定メタル方法ニ拠リ同銀行東京支店ノ指揮ヲ受ケ貯蓄預金事務ヲ代理スルモノトス

第二条 代理店ニ於テ受入タル貯蓄預金ハ直ニ委托店ヘ回送スルモノトス

第三条 代理店ハ委托銀行及同行東京支店ニ於テ定メタル方式ニ拠リ営業ノ報告ヲ為スモノトス

第四条 代理店手数料ハ預リ金ノ千分ノ一トス

代理店ニ於テ營業用ニ供スル招牌、諸帳簿、用紙類及証券印紙ハ委托銀行東京支店ヨリ回送スルモノトス

前項ノ外業務使用人ノ給料、通信運搬費、其他一切ノ費用ハ受託店ノ負担トス

第五条 第四条第一項ノ代理手数料ハ毎年五月及ビ一一月迄六ヶ月分ヲ精算シ各同月中ニ決済スルモノトス

第六条 委托銀行ハ随時役員ヲ出張セシメ代理店營業ニ関スル調査ヲナスモノトス

第七条 此契約ノ条項ハ双方ノ合意ヲ以テ何時ニテモ更正スルコトヲ得、又一方ノ都合ニ拠リ三十日以前ノ予告ヲ以テ解約



スルコトヲ得

右契約ノ証トシテ正本式通ヲ作り各苞通ヲ保有スルモノ也

明治卅三年十二月廿三日

株式会社  
金城貯蓄銀行

頭取 安田善助 ㊦

株式会社  
群馬商業銀行

頭取 安田善衛 ㊦

代理店を引受けることの普通銀行にとつてのメリットは、契約書で定められた預金の千分の一の手数料収入以外に、貯蓄預金を扱うことにより顧客の層を広げることができる、集めた貯蓄預金を貯蓄銀行に回送せずそのまま手元に置いて運用資金にすることができる、などがあつた。<sup>(2)</sup>

金城貯蓄銀行について、各代理店が集めた貯蓄預金のうち代理店預け金の形で代理店の手元に残されていた割合を見ると、京都、十七、三十六の三行だけは九割まで代理店預け金となっているが、その他は一割乃至それ以下にすぎないことがわかる（第一四表）。従つて金城貯蓄銀行の場合、代理店→金城貯蓄銀行本店→明治商業銀行というルートで代理店の貯蓄預金は明治商業銀行に投下され、代理店受託銀行は預け金による利益は余り蒙つてはいなかつた。

代理店を通じて集めた貯蓄預金は金城貯蓄銀行全体の預金の中でどの位の比重を占めたのだろうか。一九一九年一〇月現在の金城貯蓄銀行の代理店勘定が、一九一九年上期末の預金残高（三九五万円）に占める割合を計算す

安田貯蓄銀行と安田財閥

第15表 金城貯蓄銀行代理店勘定の安田系銀行における比重

(1919年末現在)

銀行名	本店所在地	支店数 (1)	代理店数 (2)	預金 (3)	代理店貯金 (4)	(4)/(3) (5)
				千円	千円	%
安田	東京	22	19	128,563	820	0.6
第 三	"	14	14	112,630	322	0.3
日本商業	神戸	8	2	35,518	14	0.0
明治商業	東京	15	9	30,643	—	—
根 室	根室	11	11	6,871	72	1.0
二 十	岡山	11	—	22,740	—	—
京 都	京都	5	6	20,217	221	1.1
十 七	福岡	5	5	12,492	43	0.3
肥 後	熊本	11	—	24,379	—	—
百 三	大阪	25	—	98,215	—	—
第九十八	千葉	18	19	5,856	114	1.9
高 知	高知	28	—	16,926	—	—
信 濃	長野	15	—	15,169	—	—
大垣共立	大垣	17	—	7,585	—	—
正 隆	大連	10	—	23,322	—	—
第三十六	八王子	4	1	4,578	7	0.2
合 計		219	86	565,704	1,618	0.3

安田貯蓄銀行と安田財閥

注1：支店には代理店も含む。

2：代理店数が支店数よりも多い場合があるのは、本店にも代理店も置いているため。

3：代理店貯金残高だけは1919年10月13日現在。

出典：『金城貯蓄銀行本店事務引継書』（大正8年10月13日現在）、大蔵省銀行局『銀行総覧』、「大正8年下半年全国各銀行営業報告要領」『銀行通信録』415号（1920年5月）等より作成。

れば四〇・九％という高率になる。金城貯蓄銀行は預金吸収のために安田系銀行の支店網をフルに利用していたのだった。

それでは逆に安田系諸行の預金残高とそれらの銀行が金城貯蓄銀行の委託を受けて集めた貯蓄預金の残高とを対比するとどうなるであらうか（第二五表）。安田銀行は二二の支店のうち一九支店が代理店となつているにもかかわらず、その比率は〇・六％にすぎず、第三銀行にあっては一四支店の全てが代理店であったの

第16表 安田系銀行と貯蓄銀行業務

(1919年末現在)

銀行名	所在地	払込資本	支店数	直接関連ある貯蓄銀行業務の内容
安田	東京	千円 17,500	22	ナシ
	第 三	"	14	ナシ
日本商業	神戸	2,750	8	ナシ
明治商業	東京	6,100	15	金城貯蓄銀行（東京、支店数10、払込資本127千円、代表者安田善之助）
根 室	根 室	1,250	11	ナシ
二十 二	岡 山	660	11	二十二貯蓄銀行（岡山、支店数5、払込資本50千円、代表者馬場正志）
京 都	京 都	2,000	5	ナシ
十 七	福 岡	700	5	ナシ
肥 後	熊 本	4,250	11	ナシ
百 三 十	大 阪	8,741	25	ナシ
第九十八	千 葉	508	18	ナシ
高 知	高 知	2,050	28	貯蓄銀行業務兼営
信 濃	長 野	3,000	15	貯蓄銀行業務兼営
大垣共立	大 垣	1,200	17	大垣貯蓄銀行（大垣、支店0、払込資本60千円、代表者戸田鋭之助）
正 隆	大 連	3,750	10	貯蓄銀行業務兼営
第三十六	八王子	625	4	八王子貯蓄銀行（八王子、1919年12月金城貯蓄銀行に合併）

注1：代理店契約は除く。

2：支店には出張所も含む。

出典：大蔵省銀行局『第27回銀行総覧』より作成。

にわずか〇・三％にすぎな  
 かった。安田系各銀行にと  
 って代理店としての貯蓄預  
 金吸収はほとんどネグリジ  
 ブルな位置しか占めなかつ  
 た。代理店を委託される側  
 にとって余りメリットがな  
 かったことを併せて考える  
 ならば、安田系諸行は金城  
 貯蓄の代理店として貯蓄預  
 金を吸収することには積極  
 的ではなかつたと見て良い  
 だろう。

次に、安田系諸行が行な  
 っていた貯蓄銀行業務を検  
 討したい（第一六表）。一九  
 一九年末現在、安田系一六

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

行のうち貯蓄銀行業務を兼営していた銀行は三行、子銀行として貯蓄銀行を有していたもの四行で半数に満たない。安田・第三・日本商業・百三十の安田系の中でも有力な諸行はいずれも自らは貯蓄銀行業務を営まなかった。また、子銀行である貯蓄銀行でも二十二貯蓄や大垣貯蓄は安田系資本が入っておらず、親銀行を通しての間接的な支配で、直接に安田の支配は及んではいなかった。

大泉哲（一九三三年四月—一九二六年五月安田貯蓄銀行支配人、一九二五年三月—一九三三年七月同取締役）は大垣共立銀行と貯蓄銀行業務との関係について、次のように回顧している。<sup>(3)</sup>

一体安田は貯蓄銀行の経営は好まなかった。それに就いて私の一つの思出がある。大垣共立在任中のことであるが、大垣共立にはあのせまい地区に支店は一七もあった。その甚しいのは田圃の中にチョコボンと建てるような建物で、何れも地方重役連の縄張から余儀なくされた結果である。其何れの支店にも麗々と大垣貯蓄銀行支店と云う看板が掲げている。其方の係の行員は唯一人、丁度金城と安田の支店との関係そのまゝのゆき方であった。私は共立へ赴任の折、貯蓄経営の枢機には与からぬよう戒められて居た。

また、十七銀行は安田系列に入った後の一九〇六年に子銀行の福岡貯蓄銀行を分離したが、『福岡銀行二十年史』は次のように記している。<sup>(5)</sup>

系列銀行として、十七銀行と浮沈をともにした福岡貯蓄銀行は、その貯蓄預金高が明治三三年末の四九万円をピークとして三五年末三四万円、三六年末二〇万円、三七年末には一八万円と減少の一途をたどるなど全くの不振状態にあり、さらに安田善次郎が普通銀行の貯蓄銀行兼営は百害あって一利なしという信念の持主であったこともあってか、十七銀行との経営分離をはかり、明治三九年三月福岡貯蓄銀行の営業を太田清蔵の主宰に委ねた。

安田が設立時から関与した銀行（安田・第三・日本商業・明治商業・根室）は明治商業銀行以外は貯蓄銀行業

務を直接には管まなかった。後に安田系列に入った銀行の場合は、内容が不良の場合にはこれを分離し、そうでない場合は消極的な形で貯蓄銀行業務を残したようである。

以上の検討から、金城貯蓄銀行は明治商業銀行の子銀行としてはある程度積極的な役割を果たしたが、安田系銀行全体の中では貯蓄銀行業務の位置は非常に低かった。それは、安田善次郎の銀行経営政策を反映したためと考へることができる。

一九二〇年一月、金城貯蓄銀行は安田貯蓄銀行と名称を変更し、本店を明治商業銀行本店内から安田銀行本店に移し、さらに九月には独立の店舗を構えた。そして、資本金の増加、銀行合併、支店網拡大といった安田貯蓄銀行飛躍への布石が置かれてゆく。

従来、貯蓄銀行業務を重視しなかった安田財閥が、一九一〇年代末に急に方針を転換し、貯蓄銀行業務の拡大をはかった理由は何だったか。

矢野文雄『安田善次郎伝』は、安田貯蓄銀行育成は、東京大阪間の高速度電気鉄道の敷設、東京湾の大築港と並んで、安田善次郎晩年の宿願であったとし、次のように述べている。<sup>(6)</sup>

上記せし宿願の二大計画の外、氏は八十二三歳において尚更に一大発展の新懷抱を有って居た、先ずその第一は預金吸集の新方法で、今の氏の手中に在る預金六億万円を更に十億万円以上に増加するの企てである。氏は日本で零碎な貯金を、まだ十分に吸収し得べき莫大の余地あることを洞察して居た、ついでに全国各地に安田貯蓄銀行の支店を網の目の如く無数に設置し、而してこれを吸収するに信用ある善次郎氏の名を以てし、貯金全部の責任を負い、かつその預りたる金は、すべて東京市債八億円の如き確実なるものに振り向け、他に濫用の恐れなきことを示し、またその利率も他の貯蓄銀行より一分乃至一分五厘方高くし、加うるに何等かの奨励法を設け、自分自ら国中を行脚してこれを説法し、一は世間に

安田貯蓄銀行と安田財閥

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

節儉の美風を慕憑し、一は因って以て貯金を吸集するの趣向であった。

前年後藤新平子が、東京市長時代に企てたる、都市改良八億円計画の如きは、実に善次郎氏が予ねてより懐抱し来りし計画にやや符合する所ありし訳にて、後藤子と会見しこれを引受くるの内談を開きしと云うも、その実は予ねてよりこの大計画が胸中に定まって居たからである。

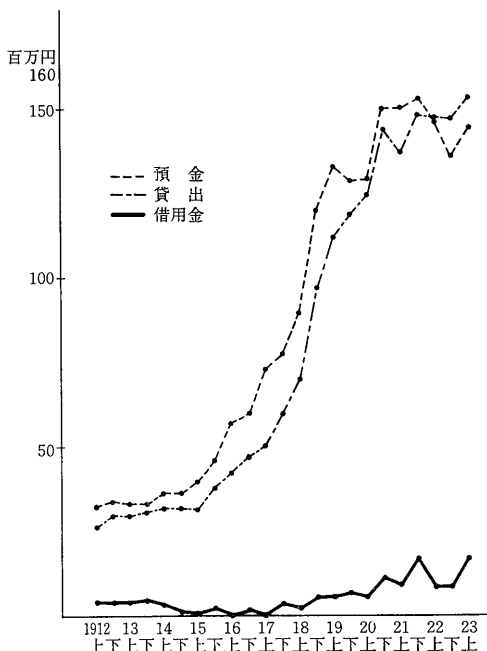
矢野の記述を読む限りでは、安田善次郎が後藤新平東京市長の都市改造計画を資金的に援助するために安田貯蓄銀行の拡充を図ったとも解釈しうる。しかし、『安田保善社史稿本』は、金城貯蓄銀行から安田貯蓄銀行への改称が一九二〇（大正九）年一月、後藤の東京市長就任が同年一二月、八億円計画の市会への提出が一九二一年四月であるのだから、「安田貯蓄の改称は八億円と無関係」であると判定し、次のように述べている。<sup>(7)</sup>

安田貯蓄も出来て貯蓄の爲めの銀行網も確立したところへ恰度八億円計画の話が出たので、貯蓄銀行を利用するのが最も確実であり有利であると信じ、善次郎は後藤と折衝する折に確信を以て、八億円計画及び港湾の爲めの外債五億をも一手に引受ても宜いと言ひ切れたのである。

時間的な前後関係の食い違いだけでなく、矢野の記述は、「東京市債八億円の如き確実なるもの」（確実というのは低利廻を意味するだろう）へ放資するために、他の貯蓄銀行よりも高利率で預金を吸収するという点にも矛盾がある。

安田貯蓄銀行への改組の理由は安田銀行の資金難ではなかったかと思われる。安田銀行の預金は一九一九年下期、一九二〇年上期の二期にわたって預金の減少・停滞を記録し、そのため同行の資金繰りは極度に逼迫した（第二図）。それ以前から安田銀行の預金の伸びは貸出金の伸びに対応できず、一九一七年下期以降一九二一年下期まで借入

第2図 安田銀行 預金・貸出・借入金（その1）



注：貸出にはコール・ローン，借入金にはコール・マネーは含まない。

出典：『安田銀行六十年誌』附表。

までも、資金吸収に努めなければならぬ苦況にあったことを示している<sup>(9)</sup>と主張する。

預金利子協定がまだ成立していない貯蓄銀行に安田が抜け道を見出したのは事実であろう。しかも、預金を吸収するためには、安田銀行乃至安田系列銀行が地方支店網を拡大するよりも、預金吸収目的だけに利用できる安田貯蓄銀行支店の開設の方が効率的である<sup>(10)</sup>。安田銀行自体はそれまで東京には支店を置いておらず、東京市内はとくに明治商業銀行にまかされている感があった。ところが、明治商業銀行は多額の不良貸出を抱えて瀕死の状態にある。金城貯蓄銀行を明治商業銀行から切り離し、それを安田貯蓄銀行と改称し、東京をはじめとする大都

金は漸増していた。一九一九年の預金減少は、<sup>(8)</sup>見氏が指摘しているように、それまで加盟を渋っていた安田銀行が一九一八年末に成立した大都市預金利子協定に取り込まれたことによってもたらされた<sup>(8)</sup>。見氏はさらに、「このことは、安田が協定前に高利預金に依存する度合が高かったことを示唆すると同時に、協定後安田が本支店勘定あるいは貯蓄銀行を径路とする破壊活動に訴えて

安田監業銀行と安田監業

第17表 各名会社会保善社 貸借対照表 (各年末、単位：千円)

勘定項目	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923
有価証券	15,637	16,392	17,983	18,943	19,005	24,812	34,017	41,484	52,110	47,535	61,837	63,698
債券	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
債式	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
地物	27	24	22	15	15	300	300	300	12	41	300	300
不動産	15,610	16,368	17,961	18,928	18,990	24,498	33,703	41,171	51,798	47,194	61,540	63,340
土地	1,266	3,074	3,243	3,276	3,661	3,758	3,862	3,914	3,916	3,925	4,741	7,651
建物	1,183	2,992	3,147	3,185	3,568	3,661	3,775	3,810	3,812	3,721	3,902	5,599
貸借倒当	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
損失	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	17,331	20,041	21,762	22,570	23,210	29,513	42,707	52,020	60,464	61,054	76,934	77,600
負債	5,657	7,616	8,905	9,122	8,706	14,024	25,485	34,533	38,974	28,004	43,903	43,576
借入金	2,011	1,921	1,924	1,720	2,104	2,103	5,178	13,751	11,720	11,720	36,967	37,093
銀行預	3,646	5,695	7,081	7,402	6,602	11,921	20,307	20,782	27,254	16,284	6,966	6,483
積立	1,292	1,422	1,434	1,848	2,031	1,998	2,080	61	63	69	73	98
受本	80	178	229	14	24	35	49	323	90	161	253	625
繰越	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	30,000	30,000	30,000
金	105	600	1,000	1,335	1,975	2,855	3,975	5,085	6,281	1,780	2,277	2,941
金	193	—	—	—	—	—	—	—	3,424	1,123	61	357
金	—	—	—	—	—	—	—	—	1,628	—	364	—
計	17,331	20,041	21,762	22,570	23,210	29,513	42,707	52,020	60,464	61,054	76,934	77,600

注1：預り金は修徳準備預り金、修徳預り金、身元保証金、敷金の合計。  
 2：諸積立金は積立金、別段積立金、賞与及恩給基金、勤続慰勞基金の合計。  
 出典：各名会社会保善社『毎半期損益決算表』第1号、第2号〔安田不動産〕より作成。



市に支店網を張りめぐらそうとした理由は以上のように考えて良いだろう。

ところで、安田銀行の資金逼迫の原因となった貸出増大は何によるのであろうか。これを明らかにする安田銀行側の史料は存在しないが、推定することは可能である。

第一は、<sup>(11)</sup> 保善社が急成長したのにもない、保善社の借入金が増加したことである。保善社の貸借対照表によれば、保善社の株式保有高は一九一六年末の一、八九九万円から、一九年末の四、一一七万円へと、わずか三年間に二・二倍に増大した(第一七表)。株式取得あるいは増資払込資金は主に借入金によってまかなわれたので、同じ期間に借入金は八七〇万円から三、四五三万へと四倍に増大したのである。この借入金が安田銀行からのみ調達されたのかどうかは不明であるが、主体は安田銀行であったと思われる。三井財閥とは対照的に、<sup>(12)</sup> 安田財閥は借入金依存型の財閥であり、両財閥の資金構造の違いから両財閥傘下金融機関の資金吸収方法の違いを説明することができよう。

第二は、浅野財閥への貸出増大である。浅野財閥は、好況期に造船(一九一六年浅野造船所設立)、鉄鋼(一九一八年浅野製鉄所、浅野小倉製鋼所設立)、貿易(一九一八年浅野物産設立)、電力(一九一九年庄川水力電気、関東水力電気設立)など新規部門への進出を果すとともに、セメント(浅野セメント)、築港(鶴見埋立)、海運(東洋汽船)、鉱山(大日本鉱業・朝鮮鉄山)の旧来から携っていた部門も拡大した。この間、持株会社である浅野合資会社(一九一四年設立、資本金三〇〇万)は、一九一八年には浅野同族株式会社へ改組して実に資本金は三、五〇〇万円(払込二七五〇万円)に膨張したのだ<sup>(13)</sup>。安田善次郎と浅野総一郎とが親密であったことは周知のところであるが、安田系金融機関が大戦期に浅野財閥および浅野系企業にどの位貸し出していたかはわからない。浅野への固定貸は、昭

安田貯蓄銀行と安田財閥

和恐慌以降まで安田銀行を悩ませた大問題となったが、一九二八年末の安田銀行の貸出残高は浅野同族二、四二七万円、東洋汽船三、〇七五万円、浅野造船所一、七九九万円などであった。<sup>(14)</sup>大戦期の数字を確定しえないにせよ、好況期に安田銀行が浅野系企業に多額の貸付を行なったことは疑い得ない。

注

- (1) 『安田保善社史稿本』二四七四～二四七六頁より引用(原史料は富士銀行蔵)。なお、この契約書は協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』が掲げている一九〇六年の第九十八銀行との約定書と大体同一である(一一〇～一一頁)。
- (2) 貯蓄銀行代理店一般については、進藤寛「兩大戦間における地方貯蓄銀行と地方銀行」『地方金融史研究』八号(一九七七年三月)三四～九頁、進藤、前掲「地方貯蓄銀行の再編成」四九九～五〇九頁参照。
- (3) 『大泉談話録』(昭和三五年六月三〇日)九～一〇頁。
- (4) 正しくは「金城と明治商業支店との関係」である。
- (5) 『福岡銀行二〇年史』(一九六九年)一八頁。
- (6) 矢野竜溪『安田善次郎伝』(中公文庫、一九七九年〔初版、一九二五年〕)三〇二頁。
- (7) 八徳門計画については、前掲『安田保善社とその関係事業史』四九四～五〇九頁、遠藤常久『初代安田善次郎翁と後藤新平翁』(一九八〇年、安田清交倶楽部)参照。
- (8) 露見誠良「第一次大戦期金利協定と都市金融市場(下)」『金融経済』一八九号(一九八一年八月)五〇頁。
- (9) 同右論文、八九頁。
- (10) 結城豊太郎の次の発言は、貯蓄銀行拡大をみずからの業績としている点で正しくないが、このような方針の転換があったことを明示するものである。  
「安田銀行それ自体は、支店としてもそうたくさんなかったのですが、それらの銀行を整理したりしていると、ほ

とんど全国に支店を網羅するようになった。私が行ってからののは、銀行としてそういうふうなことよりも、これは貯蓄銀行というもので全国に網を張った方がよいという考えで、安田貯蓄というものが全国津々浦々に店を置く。そうして貯蓄を奨励するというようなことで、それは大分大きくなりましたがね。」「結城豊太郎氏金融史談」(一九五〇年七月) 『日本金融史資料 昭和編』第三五巻、二八四頁。

(11) 安田保善社は、一八八七年に私盟組織保善社として発足、一九二二年に合名会社保善社に組織変更、一九二五年に安田保善社と改称した。

(12) 三井合名会社も大戦期から大戦後にかけて借入金をしているが、それはせいぜい資本金の一〇分の一程度にすぎなかった(松元宏『三井財閥の研究』(一九七九年)二二八～九頁)。

(13) 浅野財閥に関する記述は、小早川洋一「浅野財閥の多角化と経営組織——大正期から昭和初期の分析」『経営史学』一六巻一号(一九八一年四月)による。

(14) 富士銀行所蔵史料による。

#### 四 安田貯蓄銀行の発展

安田貯蓄銀行への改組から数年のうちに、同行は業界第三位の一流貯蓄銀行へ発展した。飛躍的発展の槓杆となったのが、改組の直前から一九二七年頃にかけて行なわれた、資本金増大、銀行合併、支店網拡大の施策であった。

資本金は創立以来一〇万円に据置かれていたのを、一九一九年一月中旬加貯蓄銀行の合併で三〇万円に、二月の八王子貯蓄銀行の合併で三三万円に、一九二〇年一月に金城貯蓄から安田貯蓄に改称した際に一〇〇万円

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

に、一二月に横浜中央銀行、小石川貯蔵銀行を合併して三〇〇万円に、一九二二年六月神奈川貯蓄銀行を合併して三〇三万五〇〇〇円に、一九二三年一二月に浅野昼夜貯蓄銀行を合併して四〇三万四〇〇〇円に、一九二四年一二月福岡貯蓄銀行を合併して五〇三万五〇〇〇円と、わずか五年間に五〇倍以上に増大させたのである。そして、一九二五年以降安田貯蓄銀行が解散する一九四五年まで公称資本金に変更はなかった。資本金増加は銀行合併によるものが大部分であるが、その場合も全て株式は安田系株主の所有となっており、金城貯蓄銀行時代の一九一八年に全株式が安田の所有に帰して以来、安田による株式独占が破れることはなかった(第一八表)。

安田貯蓄(金城貯蓄)銀行は全部で七行を合併したが、合併の時期は一九一九年から一九二四年までに集中している(第一九表)。個々の合併について簡単に見ておこう。

中加貯蓄銀行 既述。

八王子貯蓄銀行 第三十六銀行(本店・八王子市)の子銀行であり、頭取は吉田忠右衛門(一九一八年末現在)。第三十六銀行は一九〇七年恐慌の糸佃崩落で打撃を受けたのち経営不振に陥り、一九一七年三月安田傘下に入った<sup>(1)</sup>。八王子貯蓄銀行合併経緯の詳細は不明だが、親銀行が安田系列になったために、金城貯蓄銀行への合併が行なわれたものと思われる。

横浜中央銀行 平沼専蔵、浅井房吉ら横浜の地主派有力者が一九〇一年一月に設立<sup>(2)</sup>。子銀行として横浜中央貯蓄銀行(一九一八年末現在)を有していた。合併の経緯を『銀行通信録』は次のように伝えている<sup>(3)</sup>。

安田貯蓄銀行にては今回横浜市翁町横浜中央銀行を買収し同地に支店を設けることとし其筋に認可申請中の処愈々認可の指令に接したるを以て八月十七日より営業開始の事となれり。而して右の買収は表面合併の形式を取り横浜中央銀行は

第18表 安田貯蓄銀行株主

1922年5月	1924年6月	1929年3月	1936年12月	1940年12月
(名)保善社 安田善次郎 安田善四郎 安田善五郎 安田善雄 安田善衛 安田善助 安田彦太郎 安田善兵衛 安田善彌 安田善造 安田一雄 伊沢竹衛 竹内勝三郎	(名)保善社 安田善次郎 安田善四郎 安田善五郎 安田善雄 安田善衛 安田善助 安田彦太郎 安田善兵衛 安田善造 安田次郎 竹内勝三郎 伊沢竹衛 横田好実	安田保善社 正隆銀行 安田善次郎 安田善四郎 安田善五郎 安田善助 安田善衛 安田善兵衛 安田次郎 安田善彦 安田彦太郎 菅原大太郎 新井智三郎 大泉哲 麻井武雄 水上儀三郎	安田保善社 安田一 安田善五郎 安田善四郎 安田善衛 安田彦太郎 安田善八郎 安田善彦 大塚小一郎 林常次郎 今井忠輔 安田義彦	安田保善社 安田善五郎 安田善衛 安田彦太郎 安田孝一郎 安田新 楠雄
59,400株	79,400株	89,300株	99,600株	100,100株
14名	14名	16名	12名	7名
60,700	80,700	100,700	100,700	100,700

出典：1922年5月は安田貯蓄銀行「定款」(大正11年5月)〔一橋大学蔵〕、1924年6月は安田貯蓄銀行『第7期營業報告書』(大正12年上期)〔一橋大学蔵〕、1929年3月、1936年12月、1940年12月は安田貯蓄銀行「株主名簿」(国会図書館蔵)より作成。

第19表 安田貯蓄銀行合併銀行一覽

銀行名	所在地	合併年月	貸出		支店数	支店名	親銀行	
			預金 千円	貸出 千円				
1. 中加貯蓄銀行	東京市梁川区	1919. 11	千円 88	千円 2,091	4	芝, 浅草, 本所, 白金	倉庫銀行 (払込資本60万)	
2. 八王子貯蓄銀行	八王子市	1919. 12	30	356	0		第三十六銀行 (払込資本43万)	
3. 横浜中央銀行	横浜市	1920. 12	120	624	805	0		
4. 小石川貯蔵銀行	東京市小石川区	1920. 12	80	903	653	3	小日向, 王子, 板橋子安, 滝頭, 川崎, 二ツ谷, 神奈川, 鶴見	神奈川銀行 (払込資本20万)
5. 神奈川貯蓄銀行	横浜市	1921. 6	35	866	0	6	赤坂, 亀戸, 浅草, 神田, 芝, 鶴見, 大阪, 京都	浅野昼夜銀行 (払込資本625万)
6. 浅野昼夜貯蓄銀行	東京市京橋区	1922. 12	625	3,549	101	8		
7. 福岡貯蓄銀行	福岡市	1924. 12	250	3,995	355	0		福岡銀行 (払込資本237万)

注：データは合併時に最も近いものをとった。すなわち、

中加貯蓄銀行：八王子貯蓄銀行：払込資本・預金・貸出1919年6月末、支店数、親銀行資本金1918年末。

横浜中央銀行：払込資本1919年12月末、預金・貸出1919年6月末、支店数1919年末。

小石川貯蔵銀行：払込資本・預金・貸出1920年6月末、支店数1919年末。

神奈川貯蔵銀行：払込資本1920年末、預金1920年頃、支店数、親銀行資本金1919年末。

浅野昼夜貯蓄銀行：払込資本・預金・貸出1922年6月末、支店数、親銀行資本金1921年末。

福岡貯蓄銀行：払込資本・預金・貸出1924年6月末、支店数、親銀行資本金1921年末。

出典：協和銀行『本邦貯蓄銀行史』p.173, 大蔵省銀行局『銀行総覧』などより作成。

解散し其資本金十二万円、此株式二千四百株、一株五十円を額面にて引受け同時に債権債務は本年六月三十日現状の仮安田貯蓄銀行に於て継承することせり。

合併の契機、安田との關係が以前からあったか否か、横浜中央貯蓄銀行がどうなったかなどは詳にしえない。  
**小石川貯蔵銀行** 零細な銀行であり、史料に乏しいが、当時の信用録は次のように記している。<sup>(4)</sup>

当行設立は明治三十三年六月旧名を本郷貯蔵銀行と称し本郷区春木町に於て營業し居りたるものなるが、三十七、八年頃營業不振に陥りたる結果休業整理し、重役の更迭、營業所の移転、名称の改変等を断行して再び開業し、極地味なる營業方針に因りて経営し居る模様なるも、余りに消極的なる結果、著しき發展は望み難き現状にあり。

同行の一九二〇年九月七日現在の貸借対照表によれば、預金構成は定期預金一九万円、当座預金一一万円、特別当座預金四二万円、貯蓄預金一四万円などで、貯蓄預金の割合が小さく、名称は貯蓄銀行でも実質的には普通銀行に近かったのではないかと推察される。<sup>(5)</sup>

合併の契機は経営不振にあったことは間違いない。安田側の調査の結果、貸借対照表に記載されていない八万八〇〇〇円余の不足金が判明した。<sup>(6)</sup> 明治商業銀行が一九一〇年から東京手形交換所の代理交換銀行になっていたので、安田に合併を申し込んだものと思われる。<sup>(7)</sup>

**神奈川貯蓄銀行** 一九〇六年四月に神奈川県神奈川町の素封家加藤八郎右衛門らが設立した神奈川銀行の子銀行。一九〇七年四月に神奈川銀行は商業貯蓄銀行(本店・横浜市)を買収して、同行がそれまで兼営していた貯蓄銀行業務を独立させた。<sup>(8)</sup> 神奈川銀行・神奈川貯蓄銀行は横浜鉄道、横浜倉庫に対する放漫な貸付のこげつきから一九〇八年四月に臨時休業するに至った。<sup>(9)</sup> その後経営状態は好転したが、大戦好況期に加藤八郎右衛門が鶴見に

安田貯蓄銀行と安田財閥

第20表 神奈川銀行・神奈川貯蓄銀行主要勘定 (1919年末)

勘定項目	神奈川貯蓄	
	千円	千円
貸出	2,926	157
有価証券	132	828
預け金	181	
資本	200	35
積立	65	9
預借	3,299	930
入金	214	—

出典：神奈川銀行『第47期営業報告書』(大正8年下期)、神奈川貯蓄銀行『第26期営業報告書』(大正8年下期)より作成。

自分が所在する土地一〇万坪を埋立て、倉庫・棧橋・船船営業を行なうという遠大な計画の下に資本金一〇〇〇万円(払込資本二五〇万円)で設立した横浜棧橋倉庫会社が大戦後の不況で不振に陥った影響を受け、神奈川・神奈川貯蓄両行も行詰った。<sup>(10)</sup>

保善社の調査によれば、一九二〇年一月二日現在、神奈川銀行総貸出残高三三二万円に対して固定貸は一九九万円(五九・九%)で、そのうち一〇二万円が加藤関係貸出であつ

た。この調査は、「要スルニ神奈川銀行ノ病源ハ一衆公衆ニ対スル放漫ナル貸付ヨリハ寧ロ頭取加藤八郎右衛門一派ニ対スル貸付ニ存スルモノト判定ス」と述べている。<sup>(11)</sup>

一九二〇年五月二四日、七十四銀行が休業するや、神奈川県下の各銀行は激しい取付を受けた。神奈川銀行は約四〇万円の取付を受けて二六日に休業した。<sup>(12)</sup> 頭取加藤八郎右衛門は日銀総裁の勧めを容れ、安田への経営譲渡を<sup>(13)</sup> 決意した。一九二一年四月神奈川・神奈川貯蓄銀行の全株式は安田貯蓄銀行に譲渡され、そのうち神奈川貯蓄銀行のみ六月に安田貯蓄銀行に吸収された。<sup>(14)</sup> その結果、安田貯蓄銀行は六支店を新設することができた。<sup>(15)</sup> その後、一九二二年四月に神奈川銀行の株式は同じ安田系の第三銀行に譲渡され、同行は一九二三年の安田系銀行の大会同に加わった。<sup>(16)</sup>

安田系列に入る以前の神奈川銀行と神奈川貯蓄銀行の主要勘定を掲げておく(第二〇表)。



浅野昼夜貯蓄銀行 一九一二年に浅野総一郎らにより日本昼夜貯蓄銀行の名称で東京に設立された。<sup>(17)</sup>浅野は別に、一九一三年六月から鶴見総持寺の機関銀行であった第五銀行の経営に参画していた。一九一六年四月、第五銀行は資本金を一〇〇万円に増資、行名を日本昼夜銀行と変更し、以後浅野の機関銀行となった。その際、第五銀行の貯蓄銀行業務は日本昼夜貯蓄銀行に移し、日本昼夜貯蓄銀行は日本昼夜銀行の子銀行となった。両行は一九一八年にそれぞれ、浅野昼夜銀行・浅野昼夜貯蓄銀行と改称した。<sup>(18)</sup>

大戦期の浅野財閥の急成長にともない、浅野昼夜銀行および浅野昼夜貯蓄銀行も急膨張した（浅野昼夜銀行の公称資本金は一九一六年の一〇〇万円から一九二〇年には一、〇〇〇万円となった）が、大戦後に浅野系企業の業績が悪化するにともない両行の業績も悪化した。<sup>(19)</sup>

すでに一九一九年三月三〇日に浅野昼夜貯蓄銀行大阪支店が取付を受けていたが、この時は浅野系企業はまだ破綻をきたしていなかったため、容易にこれを乗り切ることができた。<sup>(20)</sup>しかし、浅野昼夜銀行が一〇〇〇万円に増資をした（一九二〇年一月）直後の三月に反動恐慌が勃発、所有有価証券（主として浅野系企業の株式）の暴落、借入金支払期日の切迫の中で浅野系企業の資金需要の増大に対応せんがため支店拡大をはかったが、一二月八日〜一〇日の東京貯蔵銀行取付の余波を受けてかえって預金は減少してしまった。<sup>(21)</sup>

そこで浅野は安田に援助を求め、三〇〇万円の融資の約束を得た。<sup>(22)</sup>翌年九月、安田善次郎の徳通で浅野総一郎は銀行部門の安田への譲渡を決議するに至ったが、善次郎の不慮の死で交渉は遅れ、浅野昼夜銀行は一九二二年八月安田に譲渡されて再度日本昼夜銀行と改称した。<sup>(23)</sup>浅野昼夜貯蓄銀行は一九二二年一月に安田貯蓄銀行に合併された。合併により安田貯蓄は八支店（一出張所を含む）を増加した。<sup>(24)</sup>

第21表 浅野昼夜銀行・浅野昼  
夜貯蓄銀行主要勘定  
(1921年末)

勘定項目	浅野昼夜	浅野昼 夜貯蓄
	千円	千円
払込済資本	3,750	375
貸出	24,825	162
コール・ローン	400	—
有価証券	5,508	842
預け金	915	6,661
資本金	10,000	1,000
積立金	570	165
預入金	22,173	7,182
借入金	2,520	141
再割引手形	954	—
コール・マネー	1,370	—
前期繰越	80	36
当期純益	302	78

出典：『銀行通信録』436号(1922年2月)  
掲載の決算報告より作成。

一九二一年下期の浅野昼夜、浅野昼夜貯蓄両  
行の主要勘定を掲げておく(第二二表)。

**福岡貯蓄銀行** 先にも触れた通り、一九〇七年  
に十七銀行の子銀行である福岡貯蓄銀行が分離  
され、地元の有力資本家太田清蔵の手に委ねら  
れた。同行は一九一六年一〇月に普通銀行業務  
を主とするために福岡銀行と改称、さらに一九  
二一年一二月には貯蓄銀行法施行に対処するた

めに貯蓄部門を分離して福岡貯蓄銀行を新設した。その間、福岡銀行は地元最大の十七銀行をも凌駕するほどに  
まで急成長した。しかし、無理な拡大は多額の固定貸を生ぜしめることとなり、一九二二年一月の日本積善銀  
行休業のあおりを受けて同行は取付に会い、行詰ってしまった<sup>(25)</sup>。

福岡銀行は井上準之助日銀総裁の斡旋で、一九二三年九月十七銀行に合併された。他方、福岡貯蓄銀行は九月  
二五日の臨時株主総会で太田清蔵頭取の退陣が認められ、安田の傘下に入り、十二月には安田貯蓄銀行に合併さ  
れた<sup>(27)</sup>。

安田傘下に入る前の一九二三年六月末において、福岡貯蓄銀行は福岡銀行の支店網を利用して三二カ所に代理  
店を置いていた。資金運用は貸出七万五〇〇〇円に対し、預け金二六一万五〇〇〇円で、預け金は全て福岡銀行  
に預けられていた<sup>(28)</sup>。

次に支店網の拡大を検討したい。安田貯蓄銀行の改組の直前から、支店、代理店数ともに急増したが、一九一〇年代末から二〇年代のきわ立った特徴は、安田貯蓄銀行が他の安田系銀行の支店を借りるのでなく独自の支店網を拡大していったことであろう。

支店数は一九一八年の七から一九二七年の五四まで一挙に拡大し、ここで昭和恐慌後まで一段落することになる(第一三表)。一九二〇年には横浜・名古屋へ、一九二一年には京都・大阪へ、一九二四年には福岡へ、一九二七年には神戸へ進出した。支店は北海道から九州まで分布はしたが、一九二七年末で見ると、五四支店のうち四六店までが六大都市所在府県に所在していた。また、半数以上の三一店が東京府下に、九店が神奈川県下にあった。この時期の支店拡大が大都市(とくに京浜地区)に重点を置いていたことは明白である。

一九二四年の福岡貯蓄銀行合併までは銀行合併による支店増大が主流(合併により二〇店余りが増大、その後は合併によらずに支店を新規に増設した)。

代理店網もまた改組直後に顕著な拡大を示した。それは、一九二二年施行の貯蓄銀行法で普通銀行の貯蓄銀行業務兼営が禁じられたので、従来兼営であった安田系銀行の支店に新たに代理店が設置されたため、また、新たに安田系銀行が増加したためでもあった。こうした代理店網の拡大は一九二二年をピークとし、昭和金融恐慌以降は急速に激少、一九三六年頃には全廃された。<sup>(29)</sup>

支店増設による都市中心の安田貯蓄の発展の中で、代理店網を通しての地方からの預金吸収ルートは次第になおざりにされるようになっていった。

一九三三年一月、安田銀行第一業務課は安田貯蓄銀行代理店を営む支店に対し、代理店事務取扱の「存廃ニ関

安田貯蓄銀行と安田財閥

スル利害得失」につき意見を徴した。前橋支店の回答は、代理店業務の不活発さと、支店にとつての不利益とを指摘し、代理店業務は将来廃止すべきだと説いた。<sup>(30)</sup>

昭和八年一月三十一日

第一業務課長殿

安貯代理店業務ニ関スル件

前橋支店長

掲題代理店事務取扱存廃利害ニ付業秘第二〇ノ四号ヲ以テ御照会ニ接シ候処現在当店取扱高ヨリスル損益状態ハ後記ノ如ク収支相償ハザルモノニ有之候間、当前橋トシテハ次ギニ記載スル各情勢ヲ考慮シ将来廃止スルモノトシテ此際手数料ノ増額ヲ交渉シ、万一不能ノ場合ハ安田貯蓄ノ見込ヲ以テ廃止セシムル方可然モノト思考致候。

A 安田貯蓄ノ業務発展ノ為メトシテハ現況ハ余リニモ微々タルモノニシテ積極的取扱ヲ為サズシテ発展ヲ期セントスルハ到底不可能ノ事ト被存候間寧ろ両毛四支店取扱分現在額約二十九万円ヲ基礎トシテ代理店ヲ廃止シ、安田貯蓄ノ支店ヲ設置シ積極経営ヲ為シ以テ当市ニ本拠ヲ有スル上毛貯蓄銀行ト併立、零碎資金ノ蒐集ニ当ルヲ可トスベシ。

B 不動貯金銀行ハ当市ニ支店ヲ有シ群馬県下一円及埼玉県下ニ異常ノ勢力ヲ張り居レルニ見ルモ其ノ経営方法ハ異ナルモ又此種貯蓄銀行存在発展ノ余地アルモノト言ヒ得ベシ。

C 但シ県下金融界ノ動搖後群馬大同銀行ノ設立トナリ全県挙ゲテ之レガ発展ニ努力スルノ結果県外ヨリノ金融機関ニ対シテハ陰ニ陽ニ掣肘ヲ加ヘ其ノ発展ヲ阻止セントスルノ状勢ニアル今日トシテハ直チニ支店設置ノ義モ困難ナルベキカト考ヘラル、ヲ以テ機ヲ見テ計画ヲ進ムベキモノト被存候。

要之代理店ノ廃止ハ安田貯蓄支店設置等発展ノ機ヲ俟チテ之レヲ行ヒ、夫レ迄ハ素地ヲ失ハザル様当行トシテモ努力スベキ

ヲ以テ此際手数料ノ引上ヲ交渉シ当店損失ノ一部ヲ緩和スルト共ニ安田貯蓄将来ノ發展ニ資スル方可然モノト被存候。

一、廃止事由

イ經過ト現状ヨリ見ル事由

当店ハ明治三十六年開店以來貯蓄ノ代理店ヲ取扱致居候。

當時ヨリ大正四五年頃迄ハコレヲ利用シテ發展ノ資ニ供シタルモノニシテ見方ニヨリテハ相当ノ效果ヲ収メタルモノラシク候得共、近年ハ此種ノ利用効果ハ誠ニ僅少ニシテ寧ロ最近ノ狀況ニテハ手数料ノミ多クシテ利得ハ殆ンドナキモノト認めラル。

現在残高ハ

一口当り

年利貯金	二、一九三〇	二九、八一〇円	一三六六〇
定期積金	七五〇	二〇、一七〇円	
合計	二、二七〇〇	四九、九八〇円	

ニシテ金額ノ割合ニロ數過多ナレバ從ツテ手数料ヲ要スルノミニシテ実益ノ乏シキノミナラズ人件費等仔細ニ計算スルトキハ却テ犠牲ヲ払ヒ居ル状態ナリ。

ロ損益ノ實際ヨリ見タル廃止理由

右取扱ニ関シ預金係約六、七分手間ヲ要シ之ニ出納係等ノ手間ヲ加算スル時ハ約小一人手間ヲ要ス仮ニ初任給月俸參拾五円ノ書記補ヲ之ニ充テルトシテモ

支払給料年額四二〇円ノ外賞與其他若干ノ經費ヲ要ス

収入手数料 昭和七年度五一円一一

同利 年額約 一六五円 支払基金平均五〇〇〇円ニシテ仮ニ当座日歩ト本店預ケ日歩トノ差ヲ見ル（日歩 九厘）

安田貯蓄銀行と安田財閥

## 安田貯蓄銀行と安田財閥

### 二、廃止ニヨル利得

イ、今代理店ヲ廃止スルモ総貯金額ノ約半額ハ特別当座又ハ定期預金トシテ当店ニ組替セシメ得ル見込アリ而モ小口ノモノヲ除去スル訳ナレバ人手間ハ相当節約シ得ル見込ナリ

ロ、右ニヨリテ節約シタル人員ノ余裕ヲ利用シテ現金ノ勧誘等ニ当ラシメ積極的ニ経営ノ發展ヲ計ラントス

右

一九三五、六年に行なわれた安田貯蓄銀行代理店の廃止は、大蔵省の勧告による面もあったが安田銀行支店が、手数のみかかり引き合わないことを理由に代理店業務廃止を訴えたことにより実現したものと思われる。

以上、資本金増大、銀行合併、支店網拡大の三点から安田貯蓄銀行の發展策を分析したが、資本金増大の大部分は合併によるものであり、支店網拡大も合併によるものは増加支店数の半分に満たないとは云え、合併による支店網拡大が進んだ時期に預金の伸びが顕著であったことを考慮すれば、安田貯蓄銀行の發展の主な理由を銀行合併に求めた『ダイヤモンド』誌の次の評は肯んじえよう。<sup>(31)</sup>

元來、当行は、他の大貯蓄銀行のごとく積金主義の経営をしない。ことさらに派手を避けて、普通貯金中心の營業をつづけてきたものである。それでも当行の預金増加率は、実に目覚ましく飛躍的だった。大正九年一月末には、わづか千百三十四万円に過ぎなんだ預金が高が、九年後の今日では、その十二倍に近い一億三千余万円となったのだから、同業中、異數の發展といはねばなるまい。ところでこの發展の原因は、勿論、安田家の名に裏付けられた暖簾のお蔭もあるであろうが、寧ろそれ以上に預金増加を來たした原因は、想ふに、当行の預金吸收策——銀行合併による預金吸收策が、意外の功を奏したからでもあった。

第22表 安田貯蓄銀行主要勘定

(単位：千円、%)

各 年 末	公称資本金 (1)	払込資本金 (2)	積立金 (3)	当期利益金 (4)	自己資本 (5)=(2)-(4)	預 金 (6)	貸 出 (7)	有価証券 (8)	預け金 (9)	(9)/(6) %
1920(大正 9)	3,000	1,162	227	112	1,501	20,800	4,840	4,131	8,951	43.0
21( 10)	3,035	1,197	325	200	1,772	33,596	4,499	18,800	9,635	28.7
22( 11)	4,035	1,822	754	250	2,776	43,218	4,185	23,389	14,706	34.0
23( 12)	4,035	1,822	965	168	2,955	57,532	5,504	27,513	25,385	44.1
24( 13)	5,035	2,072	1,110	236	3,418	79,125	7,018	44,553	28,624	36.2
25( 14)	5,035	2,072	1,334	295	3,701	92,132	7,711	53,712	24,419	26.5
26(昭和 1)	5,035	2,072	1,628	337	4,037	109,302	15,061	61,400	33,949	31.1
27( 2)	5,035	2,072	1,930	338	4,340	117,640	12,946	90,762	15,382	13.1
28( 3)	5,035	2,072	2,212	365	4,649	135,523	11,789	113,982	12,844	9.5
29( 4)	5,035	2,072	2,551	373	4,996	134,431	12,239	116,617	9,182	6.8
30( 5)	5,035	2,072	2,899	371	5,342	120,083	9,473	102,588	10,456	8.7
31( 6)	5,035	2,072	3,229	291	5,592	122,957	11,072	98,741	16,139	13.1
32( 7)	5,035	2,072	3,366	293	5,731	141,682	9,796	121,757	10,721	7.6
33( 8)	5,035	2,072	3,605	471	6,148	182,306	14,431	159,877	8,330	4.6
34( 9)	5,035	2,072	4,035	622	6,729	211,966	14,423	191,696	8,195	3.9
35( 10)	5,035	2,072	4,529	775	7,376	240,203	15,061	222,627	6,248	2.6
36( 11)	5,035	2,072	5,069	787	7,928	275,085	15,168	260,246	5,993	2.2
37( 12)	5,035	2,072	5,576	801	8,449	331,674	17,375	314,320	7,698	2.3
38( 13)	5,035	2,072	6,071	873	9,016	423,278	17,822	402,290	10,011	2.4
39( 14)	5,035	2,072	6,713	1,077	9,862	582,922	22,477	546,129	18,867	3.2
40( 15)	5,035	5,035	7,543	1,280	13,858	782,548	32,552	741,481	19,422	2.5
41( 16)	5,035	5,035	8,463	1,539	15,031	988,754	33,312	945,018	22,889	2.3
42( 17)	5,035	5,035	9,513	1,872	16,420	1,385,570	40,410	1,324,394	39,139	2.8
43( 18)	5,035	5,035	11,063	2,194	18,292	1,881,536	42,718	1,767,474	30,010	1.6
44( 19)	5,035	5,035	12,333	2,363	19,731	2,221,647	31,189	2,132,592	53,035	2.4

出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』附表より作成。1943年と1944年の数字は翌年3月末の数字。

預金種別残高(その1)

(単位:千円,%)

うち 定期預金	種 類 別 構 成 比					うち 定期預金
	普通貯金	据置貯金	定期積金	預 金		
—	87.9	—	12.1	—	—	
—	88.0	—	12.0	—	—	
—	86.7	—	13.3	—	—	
( 834)	55.5	—	9.8	34.9	(12.6)	
( 5,387)	22.2	—	4.6	73.2	(25.9)	
( 7,603)	66.7	—	6.2	27.1	(22.6)	
( 8,969)	66.9	—	11.7	21.3	(20.8)	
(12,155)	67.9	—	10.7	21.5	(21.1)	
(15,417)	64.7	—	15.6	19.7	(19.5)	
(20,685)	60.4	—	16.9	22.7	(22.5)	
( 2,438)	51.3	30.2	15.7	2.8	( 2.2)	
( 444)	51.7	33.6	14.1	0.5	( 0.4)	
( 207)	50.3	35.4	13.9	0.3	( 0.2)	
( 92)	53.4	31.3	15.2	0.1	( 0.1)	
( 146)	52.8	31.4	15.6	0.2	( 0.1)	
( 119)	47.6	37.0	15.2	0.2	( 0.1)	
( 103)	40.5	44.8	14.6	0.1	( 0.1)	
( 123)	35.4	51.3	13.2	0.1	( 0.1)	
( 223)	33.2	53.8	12.9	0.1	( 0.1)	
( 279)	31.3	54.4	14.1	0.1	( 0.1)	
( 254)	31.0	54.0	14.9	0.1	( 0.1)	
( 421)	31.4	52.8	15.6	0.1	( 0.1)	
( 523)	32.2	53.1	14.6	0.1	( 0.1)	
( 389)	33.7	52.9	13.4	0.1	( 0.1)	
( 304)	33.6	48.2	18.2	0.0	( 0.0)	
( 521)	34.2	49.6	16.1	0.1	( 0.1)	
( 276)	31.0	54.9	14.1	0.0	( 0.0)	
( 909)	31.4	55.4	12.7	0.5	( 0.0)	
(41,646)	35.8	49.8	11.4	3.0	( 1.9)	

安田貯蓄銀行と安田財閥

数字。定期積金欄の1920年までは定期貯蓄。



第23表 金城貯蓄銀行・安田貯蓄銀行

各 年 末	預金残高 合 計	種 類 別 残 高			
		普通貯金	据置貯金	定期積金	預 金
1916(大正 5)	2,054	1,806	—	248	—
17( 6)	2,662	2,343	—	319	—
18( 7)	3,159	2,740	—	419	—
19( 8)	6,685	3,711	—	658	2,316
20( 9)	20,800	4,622	—	950	15,228
21(10)	33,596	22,400	—	2,091	9,105
22(11)	43,218	28,922	—	5,075	9,221
23(12)	57,532	39,041	—	6,132	12,359
24(13)	79,125	51,212	—	12,330	15,584
25(14)	92,132	55,687	—	15,541	20,904
26(昭和 1)	109,302	56,029	33,015	17,171	3,088
27( 2)	117,640	60,865	39,529	16,572	555
28( 3)	135,523	68,173	48,034	18,864	452
29( 4)	134,431	71,818	42,058	20,370	185
30( 5)	120,083	63,354	37,757	18,743	229
31( 6)	122,957	58,547	45,443	18,735	232
32( 7)	141,682	57,333	63,532	20,682	135
33( 8)	182,306	64,543	93,456	24,145	162
34( 9)	211,966	70,437	113,980	27,320	229
35(10)	240,203	75,249	130,749	33,921	283
36(11)	275,085	85,228	148,679	40,914	263
37(12)	331,674	104,138	175,214	51,896	426
38(13)	423,278	136,190	224,710	61,843	535
39(14)	582,922	196,183	308,121	78,224	394
40(15)	782,548	262,547	377,126	142,564	310
41(16)	988,754	338,625	490,064	159,537	528
42(17)	1,385,570	429,280	760,152	195,847	291
43(18)	1,881,536	591,447	1,042,111	239,025	8,953
44(19)	2,221,647	795,643	1,105,777	253,175	67,053

出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』附表より作成。注：1943, 1944年のみは翌年3月末の

主として銀行合併によってもたらされた安田貯蓄銀行の発展の内容を見ることにしよう。預金残高は一九二八年までは急テンポで増大、昭和恐慌期に一時減少したのち、一九三二年には二八年のピークまで回復し、以後華戦時・戦時インフレの下で再び急テンポの増加を記録した(第二表)。従って、昭和恐慌以前の発展と以後の発展を区別して論ずるのが適切と考えられる。

預金種類別の構成では、安田貯蓄銀行への改組前後の時期に貯蓄預金以外の預金の比重が異常に高まったのち、貯蓄銀行法施行以降昭和恐慌頃までは普通貯金が主流であり、それ以後は据置貯金が主流となった(一九三二年に普通貯金と据置貯金の比重が逆転)(第二三表)。逆転の理由は明らかではないが、一九三六年下期から安田貯蓄銀行に据置貯金が設けられ、それまで定期預金として扱われていたものが据置貯金に移されたことから、この年に据置貯金育成への方針転換があったことが推定できる。東京貯蓄組合銀行預金協定金利によれば、据置貯金金利は、東京組合銀行協定の定期預金金利と全く同率に定められていた。<sup>(32)</sup>一九二〇年以降、定期預金には五%の源泉課税が行なわれており、貯蓄預金の方は課税されなかったから、<sup>(33)</sup>据置貯金は普通銀行の定期預金と競合し、これを蚕食することが出来た。

定期積金の割合が一貫して低いのは、他の貯蓄銀行と比較しての特徴である。安田貯蓄銀行は専ら資金吸収機関として働くことを期待されていたので、集金コストがかさむだけでなく、積金者に対して見返りの定期積金者貸付を行わざるをえないこの種の貯蓄預金を扱うことを不利と判断したのだろう。

安田貯蓄銀行への改組の時期と昭和恐慌期の二つの転換期については、やや詳しく吟味すべき問題がある。

安田貯蓄銀行への改組前後の時期の貯蓄預金以外の預金の急増は前節で論じたところと関連して注目される。

この点を仔細に検討してみると、一九一八年末には貯蓄預金しか存在しなかったのが、貯蓄預金以外の預金が一九一九年末には全預金の三四・六%を占め、一九二〇年六月末には貯蓄預金を凌駕して五九・五%に、さらに同年末には七三・二%、一九二二年六月末には七五・一%にまで達した(第二四表)。こうして、改組前後の二年間は貯蓄銀行というよりも普通銀行の様相を呈していた。この異常な変化は、被合併銀行の預金を引継いだことによる面もあるとはいえ、主に貯蓄銀行が預金利子協定の抜け道であったことによると見て良い。安田貯蓄銀行は一九二〇年七月に東京預金利子協定への参加を余儀なくされたが、それ以後も一年間、貯蓄預金以外の預金が急ピッチで増大した。預金利子協定が忠実に守られなかったのであろう。しかし、一九二二年一月から貯蓄銀行法が施行されると、貯蓄銀行は貯蓄預金以外には定期預金と公共団体又は産業組合の要求払預金以外は許されなくなったので、当座預金・別口当座預金などは直ちに普通預金に振り替えられ、変則的な状態は終りを告げた。

昭和恐慌の際の預金減少の前兆は一九二七年の金融恐慌時からあった。三月恐慌ではほとんど影響がなかったが、四月恐慌の際には安田貯蓄銀行は激しい取付を受けた。日銀の調査は、「預金者ハ益々不安に駭ラレ殆ド銀行ノ良否ヲ顧慮スル暇ナクシテ預金引出ヲ急ギタレバ一、二有力銀行ヲ除キテ取付ニ遇ハザルモノ殆ドナク、殊ニ東京貯蔵ヲ始メ安田、川崎等ノ貯蓄銀行ニハ本支店共〔二十一日〕朝来預金者場外ニ数十間ノ列ヲナシ夜間ニ至ル迄払出ノ請求ヲ受ケタル有様ニシテ、普通銀行中ニモ安田、川崎、日本昼夜等ハ略々之ト同様ノ混雜ヲ呈シタリ」と伝えている。金融恐慌の際に激しい取付を受けた都市銀行に貯蓄銀行を子銀行に持つものが多かったことは、それらの銀行が二流銀行で信用が乏しかったせいもあるが、流言蜚語が大衆を不安を駆り立て、大衆向け銀行である貯蓄銀行の取付を惹起し、それが親銀行に波及したという点に着目すべきである。事実、「此度の取

安田貯蓄銀行と安田附屬

第24表 金城貯蓄銀行・安田貯蓄銀行 預金種類別残高 (その2)

(各月末、単位：千円)

預金種類	1918. 12	1919. 6	1919. 12	1920. 6	1920. 12	1921. 6	1921. 12	1922. 6
普通貯金	2,740	3,203	3,711	3,849	4,621	5,902	22,399	24,577
定期積金	418	470	658	742	950	1,528	2,091	2,845
小計	3,158	3,673	4,369	4,591	5,571	7,430	24,490	27,422
当座預金	—	—	559	767	1,862	2,433	863	26
別口当座預金	—	—	598	1,666	5,495	9,297	—	—
定期預金	—	—	834	3,550	5,387	7,005	7,603	8,985
別段預金	—	283	322	268	504	597	580	263
通知預金	—	—	—	500	1,978	3,083	20	—
公金預金	—	—	—	—	—	—	37	153
小計	—	283	2,315	6,752	15,228	22,418	9,105	9,429
合計	3,159	3,957	6,685	11,345	20,800	29,848	33,596	36,851

出典：金城貯蓄銀行・安田貯蓄銀行 各期『営業報告書』(原本)より作成。

付は貯蓄の神田支店に始まり、それが安田の支店に飛火したのだ」という責任論に発展し、小河原秀雄専務と本多支配人が安田貯蓄銀行を評職するに至ったと言われる。<sup>(35)</sup>

金融恐慌が一段落したのち、「浜口内閣が断行した金解禁や、東洋汽船融資等を内容とした怪文書による財界混乱を図る安田誹誘<sup>(36)</sup>」が行なわれ、安田系各銀行は緩慢な取付に襲われた。安田銀行も一九三一年下期に預金減少に転じ、三三年下期にようやく三一年上期の残高を回復することができた。安田貯蓄銀行は二九年下期から減少に転じているので、安田貯蓄銀行から安田銀行への波及現象を想定しうる。

すでに見たように、安田貯蓄銀行への改組の最大の目的は、安田系銀行への資金補給であったが、その目的は果されたのであろうか。一九三三年六月末の支店別勘定によれば、貸出が預金の一〇%を越える支店は六店にすぎなかった。余った預金は一部分支店から他銀行へ預入された他は、本店へ回送された(第二五表)。本店はそれを他銀行に預けるか、有価証券購入にあてた。支店が専ら預金吸収店舗としての役割を果していたことは明らかである。

ところで、安田貯蓄銀行全体について見ると、預け金は一九二六年まで増大しており、資金運用先としては有価証券保有に次ぐ額であった(第二二表)。預け金の預け先別では、大合同前は安田系各銀行に分散していたのが、大合同後は安田銀行が大半を占めるに至った(第二六表)。

金融恐慌以前は安田銀行の預貸率も高く、安田貯蓄銀行からの預け金を必要とする状態にあった(第三四図)。しかし、一九二二年施行の貯蓄銀行法は貯蓄銀行が特定銀行に預け金をする場合に制限を設け、親銀行への従属関係の弱化を図ろうとしていた。すなわち、第十四条で、一銀行に対する預け金の総額は、諸預り金、積金の十分

安田貯蓄銀行の安田支店

第25表 安田貯蓄銀行本支店別主要勘定(1923年6月末)

(単位：千円)

店 舗 名	預 金	貸 出	預 け 金	本支店へ貸	店 舗 名	預 金	貸 出	預 け 金	本支店へ貸
本 店	19,215	425	20,379	6	松住町支店	67	1	67	—
深川支店	1,517	102	0	1,401	麻布	22	—	21	—
芝	1,536	30	—	1,513	亀戸	137	8	132	—
浅草	3,110	206	0	2,935	川崎	718	5	—	705
本所	2,625	48	—	2,568	鶴見	943	111	0	683
白金	3,006	52	—	2,902	神奈川	1,142	46	35	1,068
小石川	1,752	475	0	1,289	横浜	1,690	426	29	1,238
小日向	1,235	17	1	1,219	浜町	29	—	28	—
山	462	—	—	452	小田原	703	42	1	641
神田	626	13	—	593	横須賀	846	93	—	749
赤坂	322	11	—	302	名古屋	453	7	29	412
田島町	449	12	0	428	京都	1,052	33	877	160
板橋	870	59	—	776	大阪	932	15	25	892
王子	975	63	—	750	弘前	518	295	193	—
大森	1,160	3	0	1,144	函館	605	9	5	591
千住	426	3	—	414	瀧頭出張所	579	4	0	571
四谷	217	9	122	88	安	547	33	—	505
本郷	197	26	60	115	合 計	51,097	2,702	22,419	—
京橋	397	5	404	—					

第26表 安田貯蓄銀行 預け金預け先別

(単位：千円)

安田貯蓄銀行と安田財閥

預 け 先	1923. 6		1924. 6		1938. 12	
	残 高	制限超過額	残 高	制限超過額	残 高	制限超過額
1. 安 田	8,952	4,643	16,386	10,638	8,767	—
2. 第 三	4,316	7	—	—	—	—
3. 明 治 商 業	1,327	—	—	—	—	—
4. 京 都	1,022	62	—	—	—	—
5. 日 本 商 業	3	—	—	—	—	—
6. 二 十 二	999	—	—	—	—	—
7. 信 濃	241	—	—	—	—	—
8. 根 室	8	—	—	—	—	—
9. 十 七	69	—	138	—	209	—
10. 第 九 十 八	242	83	264	84	—	—
11. 第 三 十 六	497	209	484	174	—	—
12. 日 本 昼 夜	3,790	2,179	4,340	2,709	370	—
13. 関 西	680	272	881	470	—	—
14. 栃 木 伊 藤	140	—	187	—	—	—
15. 正 隆	91	—	118	—	—	—
16. 帝 国 商 業	—	—	922	222	500	—
⑰. 愛 知	7	—	20	—	—	—
⑱. 明 治	21	—	19	—	—	—
⑩. 三 十 五	—	—	—	—	66	—
⑳. 神奈川農工	1	—	1	—	—	—
㉑. 日 本 銀 行	—	—	—	—	60	—
22. 安 田 信 託	—	—	—	—	1,929	—
㉓. 朝 鮮 信 託	—	—	—	—	600	—
㉔. 野 村 信 託	—	—	—	—	971	—
合 計	22,413	7,457	23,764	14,299	13,476	—

注1：郵便貯金・預金部預金は除く。

2：信託会社への預け金は金銭信託又は有価証券信託。

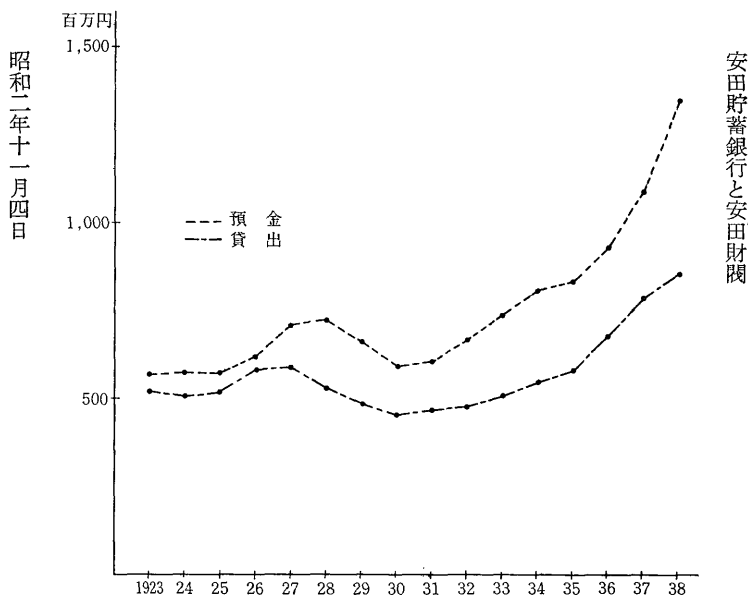
3：帝国商業銀行は1928年に第三銀行と改称した。

4：1～8は1923年の大合同に参加，○印は非安田系の銀行・信託。

出典：安田貯蓄銀行 各期『営業報告書』（原本）より作成。

### 第3図 安田銀行 預金・貸出（その2）

株式会社安田貯蓄銀行 御中



出典：『安田銀行六十年誌』附表より作成。

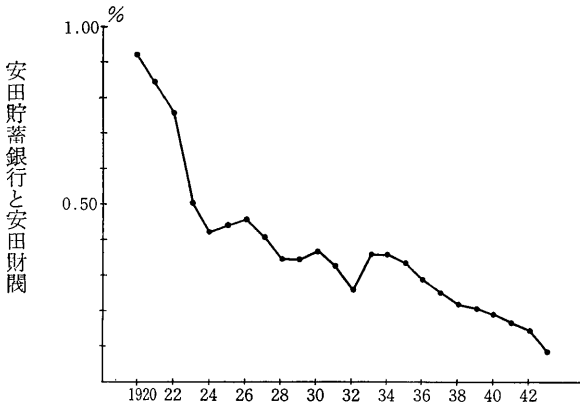
の一を限度とし、かつ預け先銀行の払込資本金及準備金の総額の四分の一を越えてはならないと定められた。<sup>(37)</sup> 安田銀行・日本昼夜銀行への一九二三年、二四年の預け金ははるかにこの制限をオーバーしていることがわかる。制限額を越えても、適格と認められた有価証券を担保に提供すれば良かったので、当面は預け金運用に支障はなかつた。<sup>(38)</sup>

大蔵省の理想は制限額内に収めることであつたから、制限額に近づくように次第に行政指導を強めていったようである。金融恐慌後の一九二七年一月付の東京府の文書は次のように指示している。<sup>(39)</sup>

東京府



第4図 安田貯蓄総資産利益率の推移



注：総資産利益率＝年間純益金／上期末資産残高  
 出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』附表その他より作成。

預け金ノ預け先銀行ニ関スル件

貴行ノ日本昼夜銀行及第三銀行ヘノ預け金ハ何レモ預け先銀行ノ払込資本金及積立金ノ合計額ノ半額以上ニシテ假令法令ニ  
 抛り相当ノ担保ヲ徴シアリト雖如斯多額ノ預け金ヲ為スハ貯蓄銀行経営上不適当ニ付預け先銀行ノ払込資本金及積立金ノ合  
 計額三分ノ一程度に減額スベキ様示達万主務省ヨリ照会越候ニ付相当処置ヲ講ジ此ノ結果申出相成度此段及示達候也

昭和恐慌以後は安田系銀行のオーバー・ローンも解消したので、もはや制限が厳密に適用されても問題はなかつた。一九三八年の預け金については、どの預け先銀行も制限をオーバーしていない。

金融恐慌以降、安田銀行の預貸率低下にともない、預け金の意義は低下し、資金運用の主体は有価証券となった。有価証券投資も、社債への投資が主流を占めている間はまだ収益をあげる余地もあったが、準戦時、戦時統制下には、安田貯蓄銀行は国債の引受機関化していった(第二七表)。

一九三五年頃から始まる超低金利時代と、統制強化にもなう課税強化の結果、貯蓄銀行は普通銀行に比して著しく不利な状態に置かれ、「試練の時代」をむかえることになった。<sup>(40)</sup>一九三六年九月、川崎貯蓄・東京貯蔵両行が川崎第百銀行に合併して、東京所在の有力貯蓄銀行二行が消滅した。<sup>(41)</sup>もはや貯蓄銀行

第27表 安田貯蓄銀行有価証券種類別

(単位：千円、%)

各 年 末	総 残 高	残 高 内 訳			構 成 比		
		公 債	社 債	株 式	公債	社債	株式
1920(大正 9)	4,131	485	311	3,335	11.7	7.5	80.7
21( 10)	18,801	3,489	4,432	10,879	18.6	23.6	57.9
22( 11)	23,389	7,585	4,691	11,113	32.4	20.1	47.5
23( 12)	27,513	10,972	5,639	10,902	39.9	20.5	39.6
24( 13)	44,553	26,484	8,380	9,689	59.4	18.8	21.7
25( 14)	53,712	27,498	15,860	10,354	51.2	29.5	19.3
26(昭和 1)	61,400	…	…	…	…	…	…
27( 2)	90,762	…	…	…	…	…	…
28( 3)	113,982	46,364	58,093	9,525	40.7	51.0	8.4
29( 4)	116,617	45,029	63,187	8,401	38.6	54.2	7.2
30( 5)	102,588	40,620	55,555	6,413	39.6	54.2	6.3
31( 6)	98,741	38,303	54,177	6,261	38.8	54.9	6.3
32( 7)	121,757	46,494	69,138	6,126	38.2	56.8	5.0
33( 8)	159,877	81,407	70,043	8,427	50.9	43.8	5.3
34( 9)	191,696	118,227	62,617	10,853	61.7	32.7	5.7
35( 10)	222,627	147,076	63,672	11,880	66.1	28.6	5.3
36( 11)	260,246	178,789	66,381	15,075	68.7	25.5	5.8
37( 12)	314,320	216,155	74,736	23,430	68.8	23.8	7.5
38( 13)	402,290	263,010	108,427	30,853	65.4	27.0	7.7
39( 14)	546,129	352,641	156,131	37,357	64.6	28.6	6.8
40( 15)	741,481	519,761	178,228	43,492	70.1	24.0	5.9
41( 16)	945,018	648,665	243,219	53,134	68.6	25.7	5.6
42( 17)	1,324,394	911,721	348,410	64,263	68.8	26.3	4.9
43( 18)	1,767,474	1,288,929	417,177	61,369	72.9	23.6	3.5
44( 19)	2,132,592	1,553,640	522,337	56,614	72.9	24.5	2.7

安田貯蓄銀行と安田財閥

注 1：有価証券価格は実価。

2：1926、1927年は『営業報告書』に内訳の記載がない。

3：1943、1944年だけは翌年3月末の数字。

出典：協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』附表その他より作成。

の経営は立ち行かないのではないかとの声も囁かれたが、安田貯蓄銀行は安田銀行との合併はあり得ないと声明し、独自の経営を維持した。<sup>(42)</sup> 大蔵省が川崎貯蓄・東京貯蔵両行の消滅による支店減少を他の貯蓄銀行に支店増設を認めることで穴埋めする政策をとったため、<sup>(43)</sup> 支店数は増大したものの、収益率は低下する一方であった(第一三表、第四図)。

以上、預金の伸びだけから見ると、昭和恐慌期の中断をはさんで、前期、後期ともに安田貯蓄銀行は順調に発展したように見えるが、資金運用の面から検討するならば、前期の発展が真に積極的な意味での発展期と規定しうるのに対し、後期は国債消化機関として国策に従属した形での展開で、実質的には後退期と見ることができよう。

#### 注

- (1) 前掲『安田保善社とその関係事業史』四六六頁。
- (2) 「株式会社横浜中央銀行の設立」『銀行通信録』一七九号(一九〇〇年一〇月)五八〇頁、『横浜市史』第四巻上(一九六五年)七四四、七五〇、七九三頁、森田忠吉編『横浜成功名譽鑑』(一九一〇年)三二二頁。
- (3) 『安田貯蓄銀行の横浜中央銀行買収』『銀行通信録』四一八号(一九二〇年八月)一七七頁。
- (4) 鈴木勇編『信用カード(東京府)』(一九一八年)八二頁。
- (5) 『小石川貯蔵銀行引継 貸借対照表及書抜金額』(大正九年九月七日現在)〔一橋大学蔵〕。
- (6) 同右史料。
- (7) 東京手形交換所『東京手形交換所五〇年史(未定稿)』六一頁。
- (8) 『神奈川銀行沿革』〔富士銀行蔵〕。

安田貯蓄銀行と安田財閥

安田貯蓄銀行と安田財閥

- (9) 「横浜地方小銀行の動搖」『銀行通信録』二七一号（一九〇八年五月）六六五頁。
- (10) 前掲『安田保善社とその関係事業史』四八五～六頁。
- (11) 保善社『神奈川銀行調査書類』（大正九年二月）（「一橋大学蔵」）。
- (12) 『横浜市史』第五卷上、六八七～八頁。
- (13) 前掲『神奈川銀行調査書類』。
- (14) 前掲『安田保善社とその関係事業史』四六九頁。
- (15) 神奈川貯蓄銀行の本支店七店舗のうち六店舗を継承し、一店舗（ニッ谷支店）は廃止した（安田貯蓄銀行『認可書』（「一橋大学蔵」））。
- (16) 前掲『神奈川銀行沿革』。
- (17) 浅野が銀行業に進出した嚆矢は第五銀行ではなく、日本昼夜貯蓄銀行であったようだ。『銀行通信録』三二五号（一九一二年一月）掲載の「日本昼夜貯蓄銀行設立」の記事は次のように伝えている。
- 「大野伝兵衛、浅野総一郎、今西兼二、白石元次郎、河浦廉一の五氏取締役に、中野武営、伊藤幹一の両氏監査役となり、地方某銀行を買収の上資本金十万円を以て京橋区竹川町に日本昼夜貯蓄銀行を設立することとなり十二日早々開業の予定なるが、同銀行の特色は主として小売商人の便利を図り営業時間は昼夜の別なく年中無休業にて預金及貸付割引を為す由なり。」
- 『富士銀行七十年誌』（一九五二年）によれば、この銀行は中野武営が計画して実現に至らなかった日本内外為替銀行設立計画の副産物として実現をみたものようである（二四九頁）。
- (18) 前掲『安田保善社とその関係事業史』五六六～七頁、前掲『富士銀行七十年誌』二四八～九頁。
- (19) 大戦期および大戦後の浅野財閥については、小早川前掲論文参照。

- (20) 日本昼夜銀行『沿革大要』(一九三三年)、「浅野昼夜貯蓄銀行大阪支店取付」『銀行通信録』四〇二号(一九一九年四月)五二七頁。
- (21) 前掲、日本昼夜銀行『沿革大要』。
- (22) 同右書。
- (23) 前掲『安田保善社とその関係事業史』五六七頁。
- (24) 「合併契約書」によれば、一対一の対等合併となっているが、株式は浅野に交付されたのではなく、実際上は買収であった(安田貯蓄銀行『株主総会議事録』〔一橋大学蔵〕)。増加した支店は、京橋・赤坂・東仲町・松任町・麻布・亀戸・江戸川〔派出所〕(以上東京府)、賑町(神奈川県)であった(『保善社社報』一〇号〔一九二二年一月〕)。
- (25) 前掲『福岡銀行二〇年史』二二頁。
- (26) 『福岡貯蓄銀行合併関係書類』〔一橋大学蔵〕。
- (27) 「安田、福岡両貯蓄銀行合併」『銀行通信録』四六八号(一九二五年一月)六八〇九頁。
- (28) 福岡貯蓄銀行『第参期営業報告書』(大正二二年上期)〔一橋大学蔵〕。
- (29) 前掲『本邦貯蓄銀行史』一一〇頁。
- (30) 安田銀行前橋支店『本店各課発来翰綴 自昭和四年至昭和十年』〔富士銀行蔵〕。
- (31) 「安田貯蓄銀行と預金吸収策」『ダイヤモンド』一七巻八号(一九二九年一月)三七頁。
- (32) 安田貯蓄銀行は一九二〇年七月以降、東京預金利子協定に参加していたが、一九二七年七月に川崎貯蓄・東京貯蔵・東京貯蓄の各行とともに協定を脱退し、東京貯蓄組合銀行預金利子協定を締結した(後藤新一『日本の金融統計』〔一九七〇年〕二六八〇九頁)。

安田貯蓄銀行と安田財閥

- (33) 前掲『本邦貯蓄銀行史』二二三頁、前掲拙稿「貯蓄銀行法の成立と独占的貯蓄銀行の形成(上)」九二頁。
- (34) 日本銀行調査局「昭和二年四月ノ金融界動搖ノ經過ニ就テ」(昭和二年五月四日)『日本金融史資料 昭和篇』第二  
五卷、三〇頁。
- (35) 前掲『大泉談話録』一五頁。
- (36) 富士銀行『八十年史編纂余話』(一九六一年)一九頁。
- (37) 前掲『本邦貯蓄銀行史』一五三頁。
- (38) 同右、一五三～四頁。
- (39) 安田貯蓄銀行『認可書』(大正九年～昭和一八年)〔一橋大学蔵〕。
- (40) 前掲『本邦貯蓄銀行史』二二七～二四五頁、「和田大蔵省銀行局長講演」『貯蓄銀行協会会報』三〇号(一九三六年  
一月)二～四頁。
- (41) 前掲『本邦貯蓄銀行史』二二八頁。
- (42) 同右書、二二八～九頁。
- (43) 同右書、二三〇頁。

五 むすび

一九四三年、普通銀行の貯蓄銀行業務兼営が認められ、貯蓄銀行の存在理由は消滅した。この時機に臨んで、安田財閥内部から安田貯蓄銀行を安田銀行に合併させるべしとの意見が出された。翌年に入ってから、合併案はさらに具体的に検討されるに至ったが、大蔵省は突然都市貯蓄銀行九行の合同を提唱し、同意しない場合には

「金融事業整備令」発動も辞さずとした。そのため、安田貯蓄銀行は折れて、敗戦も間近の一九四五年五月に解散、日本貯蓄銀行新立に参加することになった。<sup>(1)</sup>日本貯蓄銀行の成立は、安田銀行の昭和銀行合併（一九四四年八月）や十五銀行合併失敗とともに戦時統制経済下の安田財閥にとって重要な問題であった。この点については、大蔵省の政策についての立入った検討も必要なので、別の機会に改めて検討したい。

注

(1) 前掲『安田保善社とその関係事業史』八五七～八六二頁。

(2) 同右書、八一五～八頁。

〔付記〕 末尾ながら、本稿執筆にあたりお世話になった一橋大学産業経営研究所の原田忠信氏、富士銀行調査部資料保存室、安田不動産株式会社および遠藤常久氏に感謝の意を表します。